
D.C.B.B.

ヨシヒロ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・C・B・B・

【Nコード】

N8523H

【作者名】

ヨシヒロ

【あらすじ】

桜が枯れない初音島に一人の少年がやってきた。その少年の回りで起きるドタバタした日常を描いた作品です。D・C・にオリジナルキャラ（+もしかしたら別作品）を加えた物です。かなりオリジナルストーリーを行くので読みにくいかもしれませんがご了承下さい。【諸事情により主人公の名前を変更しました】

第一話

世の中なんて理不尽なんだ！（前書き）

いや、すみません。全然他のヤツを更新してないのにまた別のものを…。
日野は更新停止状態ですが、いづれ復活する予定なので許してください！

前書きが変になりましたが、D・C・B・

B・どうぞ！

第一話

世の中なんて理不尽なんだ！

「えっ？引っ越し！？」

俺、岡野弘之は朝のトーストにバターを塗っていた手を止めて目の前に座っている父親を見た。

「…ああ、急に出張が決まってな。何とかならないかと言ったんだが、断れなくてな…」

「他に人がいないって事は、父さんが作ってるダム関係？」

「そうだ。今他の奴が変に手を入れたら問題になるし、首がな……………」

俺の父さん、岡野玄十郎は建築家で、コレまでにも数多くのビルや家、はたまた美術館まで手がけていた。そのせいか、あまり家に居る時間が少なくなり、俺が家の家事を全てやっている、と言うわけだ。もちろん、朝食も俺が作った。

「…そっか。わかったよ父さん。でも、俺はどうするの？父さんに付いていくにも学校とかあるし…家だって」

「家なら問題ない。父さんの弟が初音島に住んでいてな、そこに住めるように頼んではある。それに高校なら初音島の風見学園に行くの良い。編入試験が必要になるが…、どうする弘之？」

初音島。一年中桜が咲いてるといふ不思議な島で、日本有数の観光名所としても有名だ。その枯れない桜を、昔に何人もの科学者

が調査したけど、結局原因はわからずじまい。現代の魔法とも言われている。

何回もテレビで映ってたから興味もある。でも…

「ごめん父さん。弟さんの所は断って貰えないかな？ 俺、まだこっちでやりたい事あるし、暫くはまだこの家に「スマンがこの家三日後には住めなくなるから」はあ！？ なんで！？」

「いや、弘之が残るとは考えてなくて…。出張が決まって直ぐに売ってしまったんだ。すまん！」

（なっ！いくらなんでも行動早すぎるだろ！）

「お、俺はあと一年で高校だし、部活だつてあと一年残つて」

ピロピロ ♪ ピロピロ ♪

突然鳴り出した電話に驚いた親子だったが、弘之が直ぐに受話器を取った。

「はい、岡野です」

『おお、岡野か。白藤だ』

「えっ、白藤先生！？どうしたんですか？」

電話は康二の部活の顧問の白藤 透からだった。

だが顧問から電話なんて初めてだし、それに透はこういう事が苦手と言って全くしないような教師だ。一体どうしたんだと思っていると、

『いきなりで驚くと思うが……部活が、廃部になった』

……………何ですとおお!?

「何故!? 何でいきなり廃部に!? 部員だつてまだたくさんいるし……」

『仕方ないんだ。俺も任期が切れちまつて県外の高校に飛ばされちまつたし、後釜の教師が居ないんだ。本当にすまん!最後の一年を見る事もできなくて……』

「い、いえっ!任期切れなら仕方ないですし、お世話になった先生を責められないっすよ。…それに俺も転校することになったみたいですし……」

『(なった?) 本当か?人の事を言えないが随分急だな』

「はい。だから俺は大丈夫なんで他の奴に連絡してやってください。では」

ガチャ! ツー ツー

「父さん」

「おう」

「今から学校に楽器とりに行ってくるから弟さんに連絡お願いします。初音島に行きます」

こうして、俺の風見学園への転校が決まった。

第一話

世の中なんて理不尽なんだ！（後書き）

改訂しました。 10月27日

第二話 またか。岡野の血はみんなこうなのか（前書き）

第二話です。不定期ですし、読みにくいと思いますが感想があれば
お願いします。

第二話　またか。岡野の血はみんなこうなのか

くフェリー　初音島行きく

あれから三日。学校に置いておいた楽器と初音島に行くまでに必要な物を持って、俺は新たな住居に向かっていった。

父さんの弟は普通の会社員をしていて、子供は居ないが結婚しているらしい。いや、曖昧なのは父さんがそこんとこちゃんと覚えて無くて…って、俺はなに言ってるんだか。

初音島まであと一時間。ま、新たな学園生活を夢見ながら過しますか♪

く　港　く

船に揺られて数時間。船酔いもなく無事に着けた。

「しかし、ホントに一年中桜が咲いてるんだ…」

そう、船からは遠くて桜色しか見えなかったけど、近くで見れば桜の花びらが後から後から、無限に降っているんじゃない？と思うほど降っていた。

「ま、これはもう何時でも見られるんだし、早いとこ叔父さん

とこにいつ」

） 桜公園前 ）

「さて、ここからは貰った地図を……あれ？」

ガサガサ。ガサガサガサ。ガサガサガサガサ……

「……嘘？地図忘れた！？」

出発前にあれだけチェックしたのに！？

「あの、大丈夫ですか？」

鞆の中を慌てて探していると、背後から紅い髪に白い帽子を被った女の子が声をかけてきた。

「え、えつと……あなたは？」

「あ、すみません。私は白河ことりといいます！何か困っていたみたいだったので、それで声を……」

「そうだったんだ……。実は引越し先の地図を無くしたみたいで……。（忘れたなんて死んでも言えね……。ってかプライドにかけても言えるかああ！）」

俺にだってプライドぐらいあるさ！初対面の人に、しかも女の子に言えるような事じゃない。

「（あはは…。忘れたんだ）引っ越しされたんですか…。同い年みたいだし、学校は風見学園ですか？」

「うん。あ、そういえば自己紹介がまだだったね。俺は岡野弘之。よろしく、白河さん」

「はい！こちらこそ改めてよろしくつす！…って、岡野？もしかして、岡野君の引っ越し先はやっぱり『岡野』さんでいいんですか？」

「うん。そうだよ」

「ってことは…、家の近くに岡野さんが住んでるからそこかも…。案内するね！」

「えっ、マジ！？頼む！！」

ふう、一瞬どうなるかと思ったけど、白河さんのお陰でなんとかなりそうだ…。一安心一安心。

） 岡野家前 （

「着きましたよ。ここです。ちなみに私の家はむこうのあれです」

「そっか、結構近いね。じゃあ引っ越しの挨拶が終わったら白河さんの所にも行ってもいい？」

「OKっす！是非来てください！それと私の事はことりでいいですよ」

「わかった。じゃあことり、またあとで」

「はい！また」

ことりのお陰で無事に叔父さん家に着けた。色々あつて疲れたから早く挨拶をしよう。そう思っって呼び鈴を鳴らした。

ピンポーン

あれ？気づかなかったのか…？よし、もう一度。

ピンポーン

え、留守？……………またかあああ！！

俺は呪われているのか！？いくらなんでもおかしいだろこの不運の連続は！！

と、そんな感じに悶えながらポストを見ると俺宛の手紙があったので読んでみた。

『やあ、康二君。せつかく来てくれたのにごめんね。実はこっちも本島の本社に異動が出てね、出世チャンスでもあったからどうしても…。本当にすまない！家にある家具とかは使っていていいし、生活費も多めに送るから。では！

岡野 清十郎』

それからポストの奥に鍵も入っており、それを使って家に上がった。

最早突っ込む元氣すら無くして、冷蔵庫の中身や食器などを確認して足りないものの買い出しと挨拶に行くことにした。

「うん。人間適応力がないと……。あきらめたわけじゃないかな！」

そんな独り言がよく聞こえる静かさが、とてもいたく感じる弘之

だった。

〔 白河家前 〕

俺は買い物の後ご近所さんに地元の土産をご挨拶として配っていき、最後にことりの家に来た。

（はは、まさか叔父さんまで……。岡野の血は俺以外皆こんなのかな？）

ま、考えても仕方ない。ことりのところが最後だし、早いとこ帰って夕飯作らないと）

ピンポン♪

『はい。どちら様ですか？』

「あ、ことり？岡野だけど、引っ越しの挨拶に来たよ」

『あ、岡野君？了解です。ちょっと待っててね』

それから少しして、エプロンを着けたことりが玄関から出てきた。

「や、ことり。これ引っ越しのご挨拶。よかったら食後にでも食べて」

「あ、和菓子だ！私甘い物好きだからすごく嬉しいっす！あり

がとね、岡野君」

「よかった。気に入ってもらえて」

「それより、岡野さんはどんな人でしたか？私あんまり話したことなくて…」

ビクッ！

「は、ハハハ！うん。いい人だったよ。あ！夕飯は俺が作ることになってたからもう行くね！じゃあ！（これこそ絶対に言えない！まさか叔父さんが異動でいなかったなんて…！）」

「ええっ！？岡野さん転勤でいなかったんですか！？」

「…！　ありや、俺声に出してたか…？　その…ごめんな、ことり。せつかく送ってくれたのに…」

「い、いいですよ、気にしなくて！私よりも岡野君の方が心配だよぉ」

「ハハ、まあ前も一人が多かったから大丈夫だよ」

「そつか…。じゃあ何か困った事があつたらまた来て下さい！色々と助けられると思いますし」

「うん。ありがとう。じゃあ夕飯作らないといけないから帰るわ」

「はい！じゃあ始業式でまた会いましょう！じゃね！」

こうして、俺の初音島での一日は終わった。

第二話　またか。岡野の血はみんなこうなのか（後書き）

心の部分の会話ですが、ことりに読まれているところが（）で、電
話とか何かの物越しの時は『』です。読みにくくてごめんなさい！

第三話 何でアンタがここに居るんだ！？（前書き）

久しぶりの更新！お待たせしました。…といっても、まだ感想が一つも来ていないので、お待たせは間違ってるかも…。なのでこれを読んでもくれた方、是非感想をお願いします！

第三話 何でアンタがここに居るんだ！？

） 桜公園 ）

俺は今、風見学園に編入手続き兼編入に必要なもの（制服やら教科書など）を取りに行く途中だ。

編入試験は本島の学校で（流石に風見学園からは遠かったから特例らしい）受け終え、最後の仕上げだな、これは。

今着てるのは前の学校の制服だから、ここを歩いている間は問題ないけど、学園に入ったらかなり目立つ。

あんまし人付き合いが得意じゃないからこれは遠慮したい。

ま、直ぐ済ませれば良いだけだ。うん。

） 風見学園 校門前 ）

「うーん、やっぱり案内とは雰囲気が違うな」

と、校門前で学園を見上げる。

桜の花びらをバックに佇む校舎は、本当に綺麗だった。

「というか、本当にこの島の桜は不思議だな。何で枯れないんだろう？」

「ふつ。やはりお前も疑問に思うか。確かに島の桜は一年中、比喻なしで本当に咲き続けているのだからな。物理法則も真つ青だ」

「ああ、確かに……つてうおお！？誰だ、お前！？」

いきなりの謎の声にかなりびっくりした。……いくらぼーっとしてたとしても近づいて来るのに気づかないとは、こいつ、タダ者じゃない。

「ははっ！そんなに誉めるな、照れるではないか」

心を読んだ！？

「なに、同志岡野の顔が正直なだけだ」

「……俺ってそんなに分かりやすいのか？……つて、お前誰だ！？しかも何で俺の名前知ってるんだ！？」

「ああ、自己紹介が遅れたな。俺は杉並。非公式新聞部に所属している。……ちなみに、同志岡野の情報は非公式新聞部の力だ」

な、なんつー部活。というか非公式の部に生徒の個人情報が盗まれるって、大丈夫かこの学園。

「そ、そうか。一先ずよろしく、杉並。その様子じゃあ知ってると思うけど今年からここに入る岡野弘之だ」

「ふっ、こちらこそ、だ。ところで同志岡野、職員室への行き方、知っているのか？わからないのなら途中まで案内してやるっ」

「おっ、良いのか？でも何で途中？」

「それはだな…「こらっ！杉並君！大人しく捕まりなさい！！」…こういうことだ。スマンが俺は逃げる。その風紀委員にでも案内して貰え。では、さらば！」

ドロン！

杉並はポケットからなにかを取りだし、それを地面に叩きつけた。

「げほっ、ゴホッ！アイツ、何で煙幕なんて持ってるんだよ！ゲホッ！（くそ、楽器持ってこなくてよかった）」

「ケホッ、ケホッ！杉並君、また煙幕を！」

一方、杉並を追いかけていた風紀委員の女の子は、煙幕の粉を吸い込んでしまったらしく、かなり苦しそうだ。

「君、大丈夫か？お茶あるけど…」

「ケホッ！す、すいません、ケホッ！ありがとうございます、いただきます」

ゴクッ、ゴクッ、ゴクッ

「はあ、助かりました。改めてありがとうございます」

「気にしないでいいさ」

「あれ？あなたの制服、よく見たらうちの学園のじゃない……。ということは貴方、転校生ですか？」

「うん、そうだよ。今年からここに入る岡野弘之、よろしく」

「私は中等部三年の朝倉音夢です。こちらこそ、よろしく願いますね」

そう言っ、朝倉さんは首のチョーカーの鈴を鳴らしながら微笑んだ。

「それで朝倉さん、ちょっと頼み事があるんだけど…」

「はい、なんでしょうか？」

「実はさつき杉並に職員室まで案内してもらったところだったんだけど、逃げられちゃって、代わりに案内を頼みたいんだけど…」

「そ、そうだったんですか！？私はてっきり、また杉並君が悪巧みをしてると思って…」

「…そっか、大変そうだね。杉並って何だか手強そうだし…」

「そうなんですよ！今年の卒パでも花火を打ち上げたり、テストの問題を盗んで掲示板に貼り付けたり…」

ズゴゴゴ！

うおっ！朝倉さんの背中から何か黒いオーラが！！

「…今回の入学式だって何かやらかす見たいですし……」

「……………あ、あの…朝倉さん？職員室に案内をそろそろ」

「はっ！し、失礼しました！す、直ぐ行きましょう！」

（…可愛いけど怒らしたら怖そうだな）

朝倉さんは絶対に起こらせてはならないと心に刻んだ瞬間だった。

〈校舎　職員室前〉

かなり慌てて歩き出した朝倉さんに追いつき、何とか職員室まで来れた。

「朝倉さん、どうもありがとう。お陰で助かったよ」

「いえいえ、お気になさらず。ではまた学校で。同じクラスになれたらいいですね」

「うん、そうだね（あのオーラは怖いけど…）じゃあ、またね、

朝倉さん」

ふう、一先ず職員室には来れた。後は書類を出して担任に挨拶、だな。

にしても、今回は意外と早く知り合いが出来たな。ことに杉並、朝倉さん。この調子ならクラスにめ早く馴染めそうだ。

前は一ヶ月もかかったからなあ…（遅っ）

コンコン

「失礼します。転校生の岡野弘之です。転入手続きに来ました」

「ん？ 何だやつと来たのか。待ちくたびれたぞ」

と、椅子に座りながらお茶を飲んでいた白衣の女教師が答えた。

「私は白河暦。岡野、アンタの担任だ。ま、一年間よろしく」

「あつ、はい。よろしくお願いします！」

「ははっ、そんなに固くならなくていいさ。妹からも話は聞いているよ。ちよっと前空き家になった岡野さん家に越してきた変わり者、ってね」

「えっ、白河ってまさか、ことりの？」

「ああ、そうさ。挨拶の時は料理しててね、手が放せなかったんだ。それと挨拶の菓子、旨かったよ」

「あつ、よかったです。あれ俺も好きで、よく食べるんですよ。って、ことりそんなこと言ってたんですか!？」

「フフツ、冗談だよ、冗談。ことりはそんなこと言いはしないさ。いい娘だからね」

どうやら白河先生は、かなり気さくな人みたいだ。それにジヨークも言ってくれる。この人が担任なら、いい学園生活になるような気がする。

「おっと、少し喋りすぎたな。書類の事だが、必要事項がちゃんと書いてあるなら私に出してくればよし!書いてないならさっさと書きな!」

「あ、はい。全部書いてあるので、先生よろしくお願いします」

と、何日も前に書き終えておいた書類を封筒ごと渡す。

「よし、わかった。じゃあこれで岡野は帰っていいぞ」

「はい。それではさよ」暦先生、この報告書、脱字が多いです。もうちょつと気をつけて打ってください」

あれ、この声、何処かで聞いたことあるよ。しかも電話越しに……!

「……………白藤先生?」

「……………岡野?」

「……」

「……」

「「何でお前が^{あんた}ここに居るんだ!？」」

そう、どうかで聞いたことある声だと思ったら、なんと前の学校の部活顧問、白藤透先生だった。

白藤先生は風見学園出身で、丁度いい具合に前の学校でやった部活も終わり（ほとんど強制?だったけど…）、しかも任期切れだったから風見学園に来たらしい。（一応教員歴五年）

「そうかそうか、岡野も風見に来てたのか」

そんなこんなで今現在俺と白河先生、白藤先生とで昔話（主に俺の恥ずかし話）で盛り上がっていた。

「はい。父さんが仕事で遠くに。それで父さんの弟さんにお世話になろうとしたら、ポストに叔父さんも出張だ!っていう手紙が置いてあって、かなり散々でした。あ、今のことりにはNGですよ。叔父さん家まで案内してくれたのことりなんで…」

「…にしても、岡野の家族、もとい一族はスゴいな。この年で子供を一人暮らしさせるとは…」

「いえいえ、そんなに苦労してないし、引っ越し前と同じ何で違和感無いんですよ」

「？ 確かお父さんと二人暮らし、だったよな？」

「はい。家の父さん家事能力ゼロだったから、俺が家事をほとんどやってて、それに仕事で帰るの遅かったから……」

しまった。周りの空気がちょっと重く……。どうしよ。

「そ、そうだ岡野、部活！部活はもう決めたのか！？」

おおっ、白河先生ナイス！

「はい。一応前と同じ吹奏楽部に入るつもりです。ってか白藤先生も？」

「ああ、吹部の副顧問だ。入るつもりなら大歓迎だぞ！」

白河先生のお陰で空気も戻ったし、本当に助かった。…あの話はまだしたくないからな……。

それから暫く話していると、完全に昼を回っていた。

「ありゃ、もうこんな時間に……。先生方、俺はそろそろ帰らないといけないので、帰りますね」

「おお、確かに……。話し込んで悪かったな、岡野」

「いえいえ、楽しかったから気にしないでください」

「そつだ岡野！今晚家で晩飯食つていなよ。アンタの入学祝兼あいさつのお礼に」

「え、いいんですか！？是非とも行かせて頂きます！（やり！晩飯代が浮いた！）」

ビクッ！

「あれ？白藤先生どうしました？何か顔青いし…」

「い、いや、何でもない！…気をつけるよ（ボソッ）」

「？」

白藤先生の挙動不審に心当たりがなく首を傾げていると、白河先生にはあるようでこめかみ辺りがひきつっていた。

「白く藤く先く生く？」

「ッ！？」

…その時の白河先生の顔は……だ、ダメだ！思い出しただけで体が…ブルブル

「実はここに先生の仕事が大量にがあつてねえ……よいしょ！」

ドサッ！

すると、机の上にはどこから出したんだ？と疑問に思つほどの量の紙が置かれていた（高さ約二十数センチほど）。

これを見た瞬間、白藤先生の顔は青から白に変わった。

「つて、ちよつ！？暦先生これ間違いなく俺以外の人の仕事が
……ッ！ い、いえ、やります！やりますから！！」

…尻に敷かれてるなあ、白藤先生。

「ふんっ！ ……おっと、忘れてた。じゃあ岡野、今晚家でな
大体七時くらいに来てくれ」

「は、はい。それじゃ、失礼します。白藤先生、ガンバ！」

「ハハ、ありがとな……ハア」

白藤先生のため息をバックに、俺は職員室を出た。

第三話 何でアンタがここに居るんだ！？（後書き）

ああああ！何かグダグダに！一話で終わらせる気がダ・カーポキヤ
ラと絡ませただけで二話になりました。更新は、部活の大会が近
いので、10月に入る前位に出す予定です。

第四話 出会い 演奏 団樂（前書き）

お待たせしました！部活の大会も無事終わり、こうして更新もできました。長い間お待たせした分、今回はかなり長くなっており読みにくかったらごめんなさい。m () m <

第四話 出会い 演奏 団樂

〽 桜公園 〽

白河先生と白藤先生から別れて、俺は桜公園を歩いていた。

早くこの島になれるためにいろいろなところを歩き回ったが、今のところこの桜並木が一番のお気に入りだ。

そんな中、これまた歩いているときに見つけてお気に入りになったクレープを頬張りながら、公園内を歩き回る。

（うーん、いい天気だ。昼は家のパンでいいから、食い終わったらここで楽器でも吹くか！）

そうと決まればさっさと家に帰りますか！

〽 康二の部屋 〽

弘之の楽器はそれぞれベッドの横と机の隣に掛けてある。因みに楽器はユーフォニウムとクラシックギターだ。

（うーん、ギターは家で弾けるから、やっぱしユーフォだな！）

と、ベッドの横にある黒い楽器ケースを掴んで外に出た。

） 再び桜公園前 ）

と、意気込んで桜公園に来てみたものの……人が多すぎる。雑木林が近くにある小さな公園も、クレープ屋がある並木道も。

（くっ、人が多いと吹けない……というか恥ずかしい……。ハア、まだ慣れないんだよな、これ）

前にも言ったが、康二は人付き合いが苦手な方で、主な原因が恥ずかしいから。まあ初対面でも大丈夫な人もいるが……。

（よし！こうなったら奥の方に行ってみよう！どこか開けた場所があればそこでま吹くかな♪）

そう思い、近くにあった人が通れそうな道らしきものを辿りながら奥に進んでいった。

） 枯れない桜 ）

「うわあゝ……。でかい……」

弘之は、目の前の光景に目を奪われていた。

暫く道なりに進んでいくと、突然周りから木が消え、開けた場所にてたのだ。

そして、ちょっと丘みたいになった所の頂上にとても大きな桜の木が一本だけ、立派に咲いていた。

いつも見ている桜のはずなのに、この桜の存在感は特別だった。やっぱり、並木道みたいに植えられたヤツではなく、自然と残されたものなのだろう。じゃなきゃこの大きさの説明がつかない。

ぼんやりと桜を眺めていた弘之は、ここで吹こう、と決めた。ここなら結構奥みたいだし、外に聞こえる心配もない。まさにうってつけの場所だ。

「さて。久しぶりに吹きますか！」

こうして、弘之は初音島に来て初めての練習を始めた。

） 並木道 ）

「あれ？」

私こと水越眞子は、残り少ない春休みを散歩とかで潰していた。

宿題なんぞは速攻で片付け、フルートの練習も終わって、本当にやる事が無かったのだ。

そして、暇つぶしに桜公園内の並木道を歩いていると、風にのって楽器の音が聞こえてきたのだ。

（誰だろう？うちの部活の人で公園で吹く人なんてお姉ちゃんぐらいだし……よし！気になっちゃったし行ってみよ！もしかしたら新入部員かもしれないし）

と、眞子は偶然にも康二が通った同じ道を歩いて枯れない桜まで向かった。

　　枯れない桜　　

ふむ、暫く吹いてなかったけど腕はそんなに落ちてなかった。
軽くウォーミングアップとチューニングただけで元のレベルまで戻ってくれた。

（でも、こいつがダメだったな……。後でオイルとグリス塗つとかないと……）

楽器は暫く吹いていないと悪くなってしまう。金管楽器では主

に錆び付きと官のスライド部のグリスが落ちて抜けなくなるなど、下手したら修理に出さないといけないこともある。（弘之の楽器はまだ大丈夫だか）

「さて…。最後にこれだけ吹いてやめるか！」

ピストンや官をいじっていた手を止め、弘之はそう言うとお気に入りの曲を吹くためにユーフォを構え直した。

く　　枯れない桜　　く

「あ、また始まった…。ってこれっておじいさんの古時計？」

眞子は慣れない道を歩いていると、急に再開した演奏に、耳を澄ました。

（この音、金管のユーフォニウムだ！ それにしても上手。やっぱしうちの部じゃないわ）

実は初音島の吹奏楽部はそこまで強くはない。まあ、無理してまで全国に行こう！という人が居なかったし、部員のほとんどが楽しく演奏したい、真剣ではあるが大会の成績に興味がない、という集まりだった。

（うーん…これは…。現役の人より上手かも。本当に一体誰が

…)

と、眞子がそんなことを考えている内に演奏は終わってしまった。

(あ！…しまった)。今から奥の桜まで行っても帰ってるよなあ…。ハア…。ま、ここで練習してるならまた会えるでしょ！)

そして、眞子はもと来た道を引き返していった。

） ことりside ）

その頃ことりは、歌を歌うために枯れない桜に向かっていた。だが、その表情は心なしに元気がない。

「うう…。まさか、お姉ちゃんが今晚のご飯作るなんて…。ちやんとしたもの作れるのかな？…心配」

そう、ことりの元気がない原因、それは暦の料理の腕だ。

暦は、弘之には料理中で、と言っていたが、実際はことりに料理を教えてもらっている最中で、が正しい答えだ。

暦は最近、『女なのに料理が出来ないのは可笑しい』と言い出し、ことりに料理を教えて（というか調理に強制参加）もらっていたが、いかんせん、まだ基礎の基礎しか教えていないからことりは心配なのだ。

「お姉ちゃん、私があれば」料理は味付けから火の強さ、時

間、切る大きさ。これが全て揃って初めておいしい料理になるの！
ってあれ程言ったのに…。お姉ちゃん、私の料理手伝ただけで、
一からちゃんと作ったこと無いのに、無謀すぎるよう〜」

てな具合に愚痴っていることりだが、足はちゃんと目的地に向
かっていた。

いつもの場所に向かって。

ことりが枯れない桜に誰かが居ることに気づくのに、そんなに
時間はかからなかった。まだ弘之が演奏していたからだ。

（誰だろう？私以外、ここで練習してる人なんて見たことない
し……。あ！もしかして、岡野君、かな？最近引っ越したばかりだ
し…。とりあえず行ってみよう）

ことりはなるべく足音をたてないように、ゆっくりと桜に歩い
ていった。

枯れない桜についたことりは、近くにある木に体を隠して枯れ
ない桜の近くで立ちながら吹いている人物を見た。

（やっぱり、岡野君だ！あの時持ってたケースの中身って、ア
レだったんだ…。）

ことりが隠れているのも知らずに、弘之の演奏は終わりを迎えた。

吹き終わった弘之は、フウ、と一息つき、桜の幹に背中を預けてゆつくりと座ってしまった。

すると、弘之の心の声がことりに聞こえてきた。

『ふう、久々で疲れた』

（岡野君、あんなに楽器上手だったんだ…。ちょっと意外だな）

『やっぱこの曲はいつ吹いても良いな。……ってヤバイ、何か急に……く……』

弘之は最後に心でそう言うと、ピクリとも動かなくなってしまった。

（？）

不思議に思ったことりは少しずつ弘之に近づいていく。

五メートル。

三メートル。

一メートル。

「……zzz」

弘之は桜の花の下で気持ち良さそうに寝ていた。それを見てことりは

「フフ、何だか可愛いな。…そうだ！いいこと思いついちゃった」

さて、ことりはなにを思いついたのやら……。

「う…ん？あれ？夕方？」

弘之が目を覚ますと、空は茜色に染まっていた。

（結構長く寝てたのか…。ま、色々あったからな。それにしても、何かやけに腕が軽いような？しかも頭が温かい……）

「あゝ、やっと起きましたね」

康二がまだ覚醒しきっていない頭を巡らせていると、丁度頭の上あたりから声をかけられた。…誰だ？

「もうっ！ひどいつすねえ！せつかく人が倒れそうになってた楽器を支えてあげた上に、寝や（イタズラしや）すいように膝枕までしてあげたのに！」

声の主はそう言って怒った後、プイツと顔を左に向けてしまった。

段々と康二の頭も正常に働き始め、やっと今日の前で拗ねている人物を認識し、状況も理解した。そして慌ててことりの膝から頭を上げた。

「こ、ことり！？何でこんなところに……／＼／」

「ソ・レ・は……ここ（枯れない桜）は私がいつも歌いに来ている場所だから。言ってなかったけど、それでも私、聖歌隊に入っているの」

「へえ、そうだったんだ。『ことりの歌が……聞いてみたかったな』」

「フフツ、ざんねん。私、人前じゃあんまり歌わないから、ごめんね？」

「！？……会った時から思ってたけど、ことり鋭すぎだよ」

「えへへ。でも、岡野君、顔に出やすい……から……プツ！」

「？（……ことり？何でそこで笑うんだ？）あ、それよりことり、俺の楽器は？」

ことりの謎笑いは置いといて、俺はもっとも気になっていた事を聞いた。……一応小遣い数ヶ月、で済む代物じゃないからな。

「……クスクス。ご、ごめんなさい。近くに置いてあったケース

の中つす。キズとかはついてないと思うんだけど…迷惑だった？」

「いやいや、問題ないよ。逆に感謝してる。もしこりが仕舞ってくれなかつたら楽器が壊れてたかもしれないし。本当にありがとう」

にしても俺、油断しすぎ！マジで壊れたらどうすんだよ…。でも、何であんなに眠くなつたんだ？そこまで疲れてなかったし、あの時はただ…ただ…母さんのことを…

「…しもゝし！岡野くゝん！起きてますかゝ！？」

おっと、思考の海に潜ったか。危ない危ない。

「ごめん、ちょっと思い出した事があつて」

「なあーんだ、びっくりした。何かあったかと思って心配しちゃったよ。…あ！いけない！そろそろ帰らないと！…でも帰ったら…うう」

な、何だ？いきなり暗くなって…。家に何かあるのか？

「な、何か嫌なことでもあるのか？その様子だと」

コクリ

「…もしかして白河先生関連？」

コクリ…の後にいきなり顔が上がった。…びっくりしたゝ。

「え？何でお姉ちゃんのことだってわかったの？」

「それは、何となく。それとまだ言っ てなかったけど、俺のク
ラスの担任が白河先生なんだ。今日書類と教材貰いに行くときに聞
いたんだ」

「なあーんだ。それなら納得つす。… 実は、今日お姉ちゃんが
夕飯作るんです」

ことりは納得した後、何故帰りたくないのか話はじめた。

「それなら知ってるよ。俺、夕飯にお呼ばれされたから」

ことりには初耳だったのか、目を大きく開いて驚いていた。

「ええ！？岡野君も呼ばれたの！？」

「あれ、聞いてない？」

「うんうんうんうん、全っ然！！… 実はね、岡野君、お姉ちゃ
ん、料理初心者なの」

「え！？でも挨拶の時は料理中だったって言っ てたけど」

弘之の返答にことりはため息を吐いて、弘之の誤った曆イメージ
の修正を開始した。

「はあ… やっぱり。確かに料理中だったけど、お姉ちゃんは手
伝いで野菜を切っ てただけ。… つまり、お姉ちゃんはまだ料理の手
伝いしか出来ないの。それなのにいきなり本番なんて無茶なんです。
手伝おうにも『一人でできるから』の一点張りで……。今日はカレ
ーの予定だったのに…」

あはは、そりゃ災難だ…って俺も巻き込まれた！？

「…ことり、今からでも料理に修正は「無理っす」…やっぱし」

なるほど、だからことりは歌うついでに現実逃避しに来たのか。
そして、ここで俺とバツタリと…。

いやいや、今はそんなことより白河先生の料理を何とかしないと…！素人を甘く見るとすさまじいからな、特に料理系家事スキルは。…でも今回は無理かな、ことりがあれだし。

「…ことり」

「…はいっす」

「頑張ろう。後は神様に頼るしかなさそうだ。」

「ハハ、確かに。完食目指して」

「うん…」

俺とことりは未知なる敵が待っているであろう白河家に思い足を動かした。

「よく来たな、岡野！…ん？何だことりと一緒だったのか」

「は、はい。桜公園でバツタリ会いまして…。それより白河先生、今日は夕飯に招待してくださってありがとうございます」

「気にするな。私が好きで呼んだんだし。それと岡野、その固い口調は止めてくれ。職員室の時みたいなので頼む。」

「…はい。わかりました。では改めて、今日は招待してくれてありがとうございます」

「ん、まだ固いが、いいか。んじゃ上がって上がって。料理は出来てるから」

ビクッ！！

暦の最後の一言により、弘之とことりの顔が少し引きつった。

「あ、あれ、お姉ちゃん、まだ夕飯には早いような…」

「ああ、意外と『簡単』に出来て。ことりに教えてもらったかいがあったよ」

違う、違うよ白河先生。それは失敗したから早かったただけで成功してないんだ！

「ささ、冷めないうちに早く食いな」

いつの間にかテーブルの上には白河先生が作ったと思われる料

理が所狭しと並んでいた。ほんのりと湯気が出ていてかなり…いや
凄く美味しそうだ。…でも

「……………」

ことりは、よく見ないと分からないが肩が微かに震えていた。
しかも無言。

目の前には早く食べないかな、と期待たつぷりの視線。これは早く食べないと危ない。昼に会った朝倉さんの黒いオーラ並みに！
「じ、じゃあ、いただきます！」

多少どもりながらも俺は覚悟を決め目の前にあったパスタに箸を伸ばす。

ホワイトソースがかかっているパスタをゆっくり口へ。

パクっ！…モグモグ

ことりも白河先生も弘之の反応を待っているのか、じっと固まっている。

モグモグ…ゴクリ。

「……………」

「「え？」「」

「すんごく美味しい！ 白河先生料理上手じゃないですか！！」

その反応にことりはすぐさま俺と同じパスタを一口。

「！！ 本当だ！お姉ちゃんいつの間にこんなに上達したの！？」

「実はね、本屋でいい本があるって聞いて、ことりに習う前から読んでたんだよ。あの時は……」

俺は白河姉妹の会話など耳に入らず、ただ目の前にある料理を食べていた。

「あゝ！岡野君食べ過ぎっすよ！私の分ゝ！！」

「あつ、ごめんごめん。でもな、ことり、世の中には早い者勝ちというものがあるのだよ！」

「ひ、卑怯っすよ、そんなの！ええーい、私も負けないんだから！」

こうして、康二は白河家ともより仲良くなり、夕食会は楽しく幕を閉じた。

第四話 出会い 演奏 団樂（後書き）

ちよつと曆先生のことを捏造。料理が上手いかゲームでもわからないくて…いやはや。

フッフ、遂に、

遂に登場杉並&音夢&眞子！実はこの中に本当の…ゲホッ！ゲホッ！すみません、やっぱりネタバレはできる限りしない方向なので、お願いします。それで少しですが主人公の紹介を。

岡

野 康二（オカノ コウジ） 15才

髪は短くて黒いけど陽の光があたる角度によって茶色に見える。特技は料理、掃除などの家事全般。それと音楽

と、こんな感じのD・C・B・Bで

すが、今後ともよろしくお願いします。

第五話 顔合わせ 上

） ？？？ ）

そこは、不思議な場所だった。

いや、場所、ではない。何かの空間みたいだ。

回りは真っ暗。なのに自分の体ははっきり見える。そしてたまに思い出したかのように降ってくる桜色の欠片。

試しに俺は、その二つを掴んだ…その瞬間、俺は真っ白な世界に飛ばされた。

そこにあるのは大きな桜の木が一本だけ。つい先日、ユーフォを吹いたあの桜の木だ。

その桜の根っここの所を見ると、女の子が一人座り込んでいる。泣いていた。

そしてその涙は止まることを知らないかのように次々と地面に落ちていく。

『な…んで……』

「ん？声が聞こえるのか？」

おかしい…。いつも俺が見る夢は、こんなにリアルじゃない。全部自分視点だから、こんな風に見下ろすように見ることもなんてないし、しかも知らない筈の夢の中の少女のことが聞こえるなんて事は一度もなかった。

『どうして……何にも言わずに……行っちゃったの……？』

「……」

だが、そんな女の子を見ると、ふと昔の事を思い出した。

まだ俺が小さいくて、母さんが死んでしまっただけの自分ことを………

ピピピピ！ ピピピピ！

目覚ましの音……？そっか、もう朝か……って！

ガバツ！！

弘之は被っていた布団を勢いよく投げ捨て、残像が残る位早く首を回し、時計を見る。

現時刻 AM 07:50

………寝過ごした……！！

） AM08:10 桜公園 ）

「ゼエ…ハア…ゼエ…ハア…！」

俺は桜公園を猛ダッシュで駆けていた。

何故なら…

） 回想 夕食会后 ）

弘之はことり達に感謝と別れの挨拶をした後、自分の家に向かって
っている途中、背後から人が追いかけてくるのを感じて後ろを見た。
するとそこには…

「あれ？白河先生、どうしたんすか？俺なにか忘れ物でも…」

走って来たのか少し息が荒い白河先生がいた。

「ふう…間に合った…。…岡野。言い忘れてたけど転校生は登
校時間より早めに来なきゃいけなかったんだ。一応担任と学校に関
してもう一度話すためらしいから早く来いよ」

「了解です、白河先生」

） 回想終了 ）

みたいな事があつたんだよ！…くそ、朝の変な夢のせいで間に
合うかどうか…！くっそおおお！！

[illegible]

俺は足に力を限界寸前まで入れて走った。

桜公園
眞子side

「間に合ええええええ！」

「!? な、何! 何なの! ?」

眞子は中々目が覚めない＋歩いてる途中でも寝てしまう姉の萌を諦めて、一人で登校しているところだ。萌を待つていたせいで朝は余裕だったのに急がないと危ない時間にまでなってしまったのだ。

その真横を弘之が叫びながら走り去るものだから、驚いてしまったのだ。

「全く、朝から元気な奴……ってあれ？あんな生徒うち風見にいたっけ？」

チラツとだが、眞子には康二が付けていた学生証の色が自分達と同じ色だと見えていた。

「うん、ま、いつか！それより早く学校行こ！」

多少ひっかかりが残ったが、遅刻して皆勤賞を逃さないためにも眞子は学校へと急いでいった。

〽 校門前 〽

「ゼエ…ハア…！な、何とか間に合った……」

あの大爆走のお陰か、何とか暦が指定した時間より早く来ることが出来た。…まあ、状態が少々ヤバイのはこの際気にしない。

「ゲホツ！…よし、早く職員室に行こ「あれ？岡野君どうしたんですかそんなに急いで」…あ、朝倉さん、おはよう。風紀委員の仕事？」

「おはようございます。そうですよ。校門前の服装チェックと遅刻者捕縛のためです……今日だって兄さんは越しても……！」

…何だろう、笑顔なのにこの重圧…！また黒い朝倉さんが降臨したのか……！

「え、えつと、俺早く行かなきゃいけないから！じゃあ！」

俺は朝倉さんの黒オーラに負けて直ぐさまその場を後にした。

〽 職員室 〽

色々なアクシデント？に巻き込まれながらも弘之はなんとかギリギリ間に合った。…遅れたら一体どんな目にあっていたことやら

「失礼します。白河先生、おはようございます」

「ああ、おはよう。しかしギリギリだな。遅刻したら生物実験に協力させてやったのに」

今この瞬間、弘之は遅刻しないで本当に良かったと心の底から思った。

てか生物実験って…一体学校で何してんだよ！？

「ま、遅れなくて何よりだな。一先ず、始業式前のホームルームで岡野の事を皆に伝えるからそのつもりで」

「了解です」

そして、弘之が杉並や音夢達に出会うまであと僅か。その頃、教室では…

〽 教室 〽

教室内。新しいクラスを確認し終えた生徒でほとんどの席が埋まっていた。眞子もあれから急いで学校に行き、クラスの確認を済ませて教室にはいるところだ。

「おっはよ〜」

「おはよー眞子。今日ギリギリだったけど大丈夫？何かあった？」

「いやいや〜、それが朝ね……」

ガラガラ！！

「ふう…何とか間に合った！」

少し開いていた扉をかなりの早さで開けて、教室に雪崩込むように入ってきた男子生徒がいた。走って来たのか息切れを起こしている。

「まったく音夢の奴、起こす時にまた辞書落としゃがって、お陰で強制睡眠に遅刻ギリギリじゃねえか…。……はあ、かつたりい」

愚痴りながら息を整えているのは朝倉音夢の義兄、朝倉純一だ。校内では杉並と色々問題を起こしており、風紀委員と生徒会からブ

ラックリストに登録されている。

そして遅刻の常習犯としても認識されていて、朝の音夢の黒いオーラは、ぶっちゃけ純一が原因でもあった。

「朝倉…あんたまたギリギリじゃない。あんまり音夢に負担かけないようにしなさいよ、あの子体のが弱いんだから」

眞子は友達との会話を抜けて、純一の席に近づいた。今日に限っては人のことをいえない眞子だが、そこは純一より早く来ていたから問題ないだろう。

「おう、眞子か…。今日は音夢のせいで遅刻しかけたんだ。俺のせいじゃな…」

「フフツ、やっと来たかmy同志朝倉。待ちくたびれたぞ」

「うおっ！？てめえ杉並、何度も言うが人の後ろにいきなり出現するな！心臓に悪い！」

突如純一たちの間に現れた杉並。…どうやら杉並の何処からともなく現れることは毎度の事らしい。

「気にするな。それより朝倉、お前に取って置きのニュースがあるのか…」

純一は杉並の言うことをスルーし、自分の机へと向かい、鞆を下ろすと早速寝る体勢を取った。

「つまらん奴め。このニュースは聞いて損がない」と言って毎

回面倒ごに巻き込まれてるんだ、今回だって絶対に何かあるだろ？」

「確かに」

隣で眞子もうつんうつんと頷いている。

純一が言う通り、杉並はイベントがあれば必ず何かを起こしている。今日の入学式にも何か仕掛けてあつて協力させるために違いない。

「まあまあ朝倉。今回の杉並の話に嘘はないよ」

杉並と純一が話している間に、もう一人男子生徒が近づいてきた。

「よう、工藤。おはようさん」

「おはよう、工藤君」

「おはよう朝倉。それに水越さんも。今朝もまたギリギリだな、朝倉。朝倉さんにあんまり迷惑かけるなよ」

「うるせえ、今日は音夢の性でこうなっただんだ！」

純一達に話しかけてきたのは工藤叶。女みtainな名前だがちゃんとした男子だ。

と言つても、本当に男か？と疑ってしまう程の女顔で、しかも学園でトップスリーに入る程の美貌を持っている。しかも成績優秀

ときた。体は弱いらしいけどそれを除けば完璧人間だ。

「杉並の話だけど、このクラスに転入生が来るんだとさ」

「へー、そうなんだ（ってもしかして朝横を走ってた人かな？）」

「

「確かに、害はなさそうなんだが……」

工藤の言う通り、杉並の話に害はなさそうだ。だが…

「そう！その通りだ工藤よ！そして朝倉、もうわかるよな？俺が何を考えているか…」

「分かるか！！と言うか勝手に人を巻き込むな！」

「何、非公式新聞部に勧誘するだけだ！」

杉並のわざとらしいオーバーリアクション＋スルーに、純一は軽くキレた。

「お前は良くても俺が音夢に殺される！」

「ふむ、ならば仕方がない。俺だけでやるか」

と、杉並はあっさりと引き下がり、純一は胸を撫で下ろすのであった。

「ほぐらお前ら、さつさと席につけ！」

それから直ぐに担任の暦が教室に来て、出席を取り出した。

「よし、今日は遅刻も無いし全員いるな」

暦は一度、全員を見渡してから話しを始めた。

「一部、知っている奴がいると思うが、今日このクラスに転校生が来ている。じゃあ入って来い！」

クラス中の視線が扉に集まる。そして、

ガラガラガラ

「えっと、本島から来ました岡野弘之です。皆さん、よろしくお願ひします！」

こうして、弘之の新しい学園生活が始まった。

第五話 顔合わせ 上（後書き）

…め、メチャクチャな文になってしまった！これを読まれた方読みにくくて本当にごめんなさい！この小説は一度完結させて、後からもう一度書き直すつもりで書いているモノなので、どうか今は我慢をお願いします！

実は自分、小説の題からわかるようにネーミングセンスが最悪でして、宜しければ読んでいただいている皆様方にオリキャラの名付け親になって欲しいのです！オリキャラは男子一人と女子一人で二人は後々付き合う予定です。

二人の登場は二話ぐらい後になる予定なので、よろしく願います！

第六話 顔合わせ 中（前書き）

すみません、風邪とインフルのダブルアタックで更新が遅れました。更新を待っていた方が、遅れましたが、どうぞ！

第六話 顔合わせ 中

挨拶は嘸まずに言えたが、弘之の内心は緊張のあまり頭が真っ白になっていた。

元々人付き合いが苦手なため、予め自己紹介文と質問の回答を考えていたのだが、完全に吹っ飛んでしまったのだ。

「あゝ、岡野が言った通りコイツは初音島が初めてでな、色々わからない事があるはずだからそこら辺のサポートを頼むぞ。」

弘之は今、暦の話ている内容もほとんど聞こえないくらい混乱していた。

『と、とにかく落ち着け、落ち着くんた俺！こうなったら一か八か即興で答えるしかない！』

「始業式までまだ少し時間があるから、残りは質問時間とする。何か質問ある奴はいるか？」

この言葉に弘之は小さく深呼吸をし、質問という名の弾幕を掻い潜るため気合いを入れる。

『もっ来るなら何でも来い！』

…開き直りに近かったが…。

「じゃあ先生、私からいいですか？」

一番始めに手を挙げたのは女子だった。

「ああ、高橋か。どんどん質問してやってくれ」

手を挙げた女子は高橋 美佳。水越妹とは友人で、吹奏楽部所属。楽器はクラリネットで、栗色の髪をポニーテールにした、性格も明るく男子にかなりの人気がある女生徒だ。非公式ながらもファンクラブ、まで存在する。(by杉並)

「じゃあ早速！ 岡野君って前の学校じゃ何か部活やってたの？」

「一応吹奏楽部に入ってたよ。因みに楽器はユーフォonium + α で、風見でも吹奏楽部に入るつもりです」

「え、本当！？私も吹部なんだ。よろしくね」

「そっか、こっちこそよろしく高橋さん！」

「さーて、他に質問は…」

クラスでも中心的な美佳が質問したお陰で、他のクラスメート達も質問をし始めた。

「他に趣味はないのか？」

「読書と漫画、ゲーム、それと楽器の手入れ、かな」

「どこら辺に引っ越してきたの？」

「桜公園を歩いてちよつとにある住宅街に」

「じゃあさ……」

パンパンッ！

「質問はそこまで！そろそろ時間だから皆早く移動しなよ。あと、岡野の席は朝倉兄の後ろだ」

白河先生が言った後、後ろの席にいた生徒が、めんどくさそうに手を挙げながら、

「ここだここ。俺は朝倉純一。純一でいいから俺も弘之って呼ぶけどいいか？」

その生徒はもちろん、朝倉純一だった。そして弘之は、朝倉、の名字に反応して、今朝の音夢の言葉を思い出していた。

「うん、いいよ。よろしく純一。もしかして純一って朝倉さんのお兄さん？」

そう、あの『兄さんのせいで……』をだ。

「ん？何で音夢の事知ってるんだ？…確かにそうだが……」

純一はどこか探るようにこちらを見てくる。そりゃあ可愛い妹が転校したての奴に知られている、というのは警戒するには十分な理由だな。

「実は転入手続きの時に学校に来たんだけど、その時に……っ

と、ヤバ。殆どのみんな行っちゃってる…。急ごう純一！」

「マジだな…。はあ、始業式なんて眠いだけじゃねえか。…か
つたりい」

そんな会話をしながら俺は純一に着いていつて体育館に向かった。

） 体育館 始業式 ）

「皆さん、おはようございます。こうして無事に新学期を…」

体育館着くこと暫く、今は始業式の真っ最中だ。今話しているのはこの理事長で、ためになる事を話しているはずなのだが、正直言ってかなり眠い。なんだかんだで昨日寝たのおそかったからな、特にギターやらゲームやら漫画のせいで。

と、理事長の有り難いはずの話を右から左に流していると、右肩をポンポンと叩かれて、視線だけを右に向けた。

「よう、my同志岡野よ」

そこには杉並がいた。コイツはいつの間に…。確か自己紹介の時には見かけなかったぞ？

「フハハ！何、ちょっと始業式を盛り上げるために仕掛けをして
いただけだ。すまなかったな、自己紹介の時にいられなくて」

いや、それは気にしていないからいいけど…仕掛け？

「それはいいけど杉並、仕掛けて何の事だ？どっかに爆竹とか仕掛けたのか？」

「それはだなあ…おっと、理事長の話が終わるな。そろそろ仕掛けが始まるから前を見ている、my同志」

杉並の言う通りに前を見ると、丁度理事長の話が終わって舞台袖に引つ込む所だった。一体何を仕掛けたんだ？

「えゝ、次は教頭先生のお話です」

お、次は教頭かゝ、などと考えながら生徒会の人と思われる女子を見る。黒に近い青色の髪に、黒い大きな瞳。かなりの美人さんだ。

「おいおい、なに生徒会長などに見とれている。本命は後ろの教頭だ」

確かに、生徒会長の後ろを見ると、年のわりには髪が多すぎるような気がする教頭先生がいた。そして舞台中央にあるマイクに移動していった。

「フッフ…後少し…後少し…」

本当に杉並は何を考えているんだ？

そうこうしている内に、教頭先生の長〜いお話が始まった。…

つか何で理事長より長いの……。始まってからもう十分以上経ってるし、回りなんか欠伸してる奴まで……。ってあれ？何かワクワクしてる奴も複数いる……？

「よし、そろそろ……。岡野よ、この糸をを持ってもらえないか？そして、俺の合図の後に後ろに思いっきり引つ張ってくれ。頼んだぞ！」

「？ まあ、持つだけなら……引つ張らんぞ？」

杉並の行動パターンを読めなかった俺は、この後猛烈に後悔することになるとは知らず、に杉並から糸を受け取ってしまった。

「だからして、勉強を……」

まだ続いてるよ教頭先生。いくらなんでも十五分過ぎたら止めてくれ。眠いから。

「今だ！」

いきなり杉並が合図を出し、俺はそれにつられて糸を思いっきり引つ張り、杉並はポケットから謎のスイッチを取り出して押した。すると……

「集中し……。ん？ああ！！私の、私のカツラが無い！！？」

何と、教頭の頭から髪がなくなり、ピカピカした太陽が顔を出したのだ。

これには、みんな事態の変化が急すぎたのか呆然としていたのだが、暫くするとクスクス笑いがいろんな所から出てきて、終いに

は体育館全体が笑いの渦に飲み込まれた。

一部の教師も、声は出していないが笑いを堪えている。

「し、静かに！静かにしなさい！」

風紀委員と生徒会、生徒指導の先生が全力で止めにかかっているが、ここまで大きな事態はそう簡単には収まらないだろう。

そして、この事件の犯人はというと…

「はーっはっはっは！素晴らしいことになったな、同志岡野よ！」

「っておいこら杉並、俺を巻き込みやがったな！？というか教頭先生のカツラは何処行った！？」

「落ち着け岡野。これは一種のデモンストレーションだ」

「これが！？こんな規模のデモンストレーションがあるか！つか何の！？しかも質問無視すんな！！」

「我が非公式新聞部に決まっているではないか！…ではちょっと失礼」

その言葉の後、杉並は瞬きをした後には姿が消えていた。…アイツは忍者か？

『あーテスト。本日は晴天なり』

と、いきなり杉並の声がスピーカーから流れてきた。生徒達の騒ぎもいきなりの杉並の声でかなり沈静化した。

『オッホン、では。初めましてだ新入生&転入生の諸君！俺は非公式新聞部の杉並だ！まずは俺からのスペシャルイベントはいかがだったかな？一応これは我が非公式新聞部の一足早いデモンストレーションだと思ってくれたまえ』

あいつは一体何処から喋ってた？何か風紀委員と教師の皆さま方が目を血走らせて杉並を探しているんだが…

『フツ、さすがにこれ以上長引くと皆が退屈してしまいそうだからこれにて失礼！新入生…特に岡野！俺達非公式新聞部はお前を待っている！それでは、アディオス！』

…こうして、俺の記念すべき初登校の日は、杉並の余計な一言によりハチャメチャなものになった……。

）
廊下
）

その後俺は、周りから好奇の視線を浴びながら教室に戻る途中、純一に哀れみをこめてポンと肩を叩かれた。

「お前も災難だな、杉並に目を付けられるとは…」

「…ハハ。初めて会った時から変な奴とは思ってたけど、まさ

かこれ程とはね…」

弘之はやけに遠い目をしながらそう言った。多分、これで弘之は目立たずに学校生活を送るのは無理だろう。杉並のせいだ！

「……岡野君？」

「は、はいいい！！」

背後からの声は、朝倉さんだった。いつの間に…ってしかも後ろに何か怖くて黒いオーラが展開されてるんですけど！？

「岡野君は兄さんみたいに悪の道に堕ちたりしませんよね？」

「ちよつと待て音夢！俺はそんな道に落ちていない！杉並が巻き込むだけだ！岡野だってそうだぞ！」

「う、うん！しないしない！第一僕は吹部に入るんだから新聞部なんて入れるわ」ところがかし！この学校は入ることができるのだ！」

こ、この声は！！

声が聞こえた途端、朝倉さんは戦闘態勢に、純一の奴はすぐ逃げられるように足に力を入れ、僕は何処から言っているのか周囲を見回す。

「杉並君！！また問題を起こしましたね！？もう少しは静かな学園生活を送ることはできないんですか！？」

朝倉さんは戦闘態勢を崩さず、ジワジワと俺の方に……ってこっ

ち！？

「ふつ。あの程度を防げないでなにが風紀を守るだ！片腹痛いわ！」

「~~~~~っ！姿が見えないからって調子に乗っ……て……！」

もう完全に朝倉さんの攻撃範囲内に……。どうしよう、逃げよっかな……？

ブワッ！

「うわっ！」

朝倉さんは何かに気づいたと思った瞬間、目にも止まらぬ早さで腕を突き出した。

当然俺は反応できず、朝倉さんの手は右肩を少し擦り、何かを掴んだと思うとそれを床に叩きつけた。

「……へ？それって……」

「ザザッ……ふつ……見破る……は流……だな……ザ……今日は……の辺で……さらば……！」

ボンッ！

岡野の肩に付いていた超小型スピーカーは軽く煙と爆発音を出して壊れた。……何処のスパイ映画？と思ったが、誰も口には出さなかった。

「……はああ……」「……」

この辺なやりとりが終わった途端、3人は揃って重たいため息を吐いたのだった。

そんなこんなで疲れた始業式であったが、帰りのホームルームも終わり、弘之は帰り支度をしていた。
と、そこに...

「あ、岡野君！」

「あれ、高橋さん。どうしたの？」

美佳がいた。走って来たのか、後ろのポニーテールが左右に揺れている。...どこか犬の尻尾のように見えて面白かった。

「実は、午後から部活があつて。それで岡野君を誘いに来たの！それとあと一人...」

そう言つと、美佳が入ってきた扉の方から誰かが走ってくる足音が聞こえてきた。

「ちょ、ちょっと美佳、早すぎだよ！少しはこっちを考えて走つてよ！」

「あはは！ごめんね、眞子」

「全くもうっ!」

走りながら入ってきたのは眞子だった。

「えっと……水越さん…だっけ? どうして水越さんも?」

「うん、実は眞子も吹奏楽部でフルート吹いてるんだ! 一緒のクラスだし、二人で岡野君を誘おう、ってなったの」

「そしたら、美佳は私が用事あるのに先に行っちゃっし…」

「あ、あはは…。ごめんなさい」

「ま、それはいいとして! 岡野君どうする? 部活見学」

弘之は二人の誘いに、少しだけ考える。

『入ることは白藤先生に言っただけあるし、でもせっかく誘ってくれたのに…。よし、これで行こう!』

何か思い付いたらしく康二は顔をあげて二人に話始めた。

「ありがとう。でも俺、昼飯持っていないし楽器も家だから、午後から行ってもいいかな?」

「あゝ、そっかあ。それじゃあ仕方ないって、岡野君楽器持ってるの!?」

「あ、ああ。でも結構古いし、所々錆びてるけどね」

「いやゝ、内の部で金管の、しかも個人持ちって少ないから、ちよつと驚いちゃった。わかった。じゃあ岡野君は昼過ぎに来るって皆に伝えておくわね」

「じゃあそれで。お願いします」

「うん。任せなさい！それと私の事は眞子でいいわよ」

「あ！じゃあわたしも美佳でいい！」

「了解。じゃあ二人とも俺のことは好きに呼んでいいから。それじゃ、これからよろしく、眞子、美佳！」

「じゃあまたね、岡野」

「うん、また後で！」

こうして、弘之の部活初参加が決定したのだった。

第六話 顔合わせ 中（後書き）

や、やっとオリキャラ2号、高橋 美佳の登場です。以前書いたように、オリキャラの名前を募集しましたが、その布石として一人だしました。そう、生徒会長です。容姿は指定してしまいましたが、性格、口調は一緒に書いてもらえればそれに沿って書いていこうと思います。

読んでいておかしい、口調や一人称が変などがありましたら、ご指摘のほど、よろしくお願いします。

第七話 顔合わせ 下

弘之は家に戻って、直ぐさま冷蔵庫を確認。昼のメニューを考え出した。

「うん、昨日のご飯とサラダ、それに肉じゃがが……。今夜はこの肉じゃがとサラダにして、昼はご飯をチャーハンにして食うか」
メニューが決まったら即調理開始。チャーハンだから時間もかからずにすぐにできた。

そしてあつという間に完食。そして食後のお茶（ただの麦茶だが）を飲んでいると、弘之の耳に異変が起きた。

「がっ！！（な、んだ、コレ？！耳が……！！）」

いきなり、耳に激痛が走った。こんな事は本島に居たときには全くなかったから、ただ痛みに耐えて床に倒れるしかなかった。そんな痛みも十秒ぐらいで治まったが、弘之には何分も続いているように感じらるほどの痛みだった。

（い、一体何が起こったんだ？こんな初めてだし、今度病院行かないとな……。あ、やばい、そろそろ出ないと）

痛みは一時的な物で、後に残ることなかった。だが、弘之はこのとき、この痛みがこれからの生活に大きな影響を与える事に気づくことはなかった。

） 風見学園 ）

その頃、風見学園の屋上で、眞子は姉の萌と美佳の三人で鍋を食べていた。

「それにしても、眞子達って全然飽きないよね、鍋。…あ、その肉とネギ頂戴」

「そんなこと言いながらも、誘えば毎回来る美佳も美佳よ……っと。はい、どうぞ」

「ありがと。ま、確かにそうだね。でも私、鍋好きだし、せっかく親友が誘ってくれてるのに断る理由なんて無いじゃん！（…それに食費浮くしね）」

「そっか……ってコラ、お姉ちゃん！食べながら寝ない！」

「……zzz つは！やつぱり、お鍋は醤油だしですよね、眞子ちゃん ……zzz」

「なに寝ぼけて……ってまた寝ないの！お昼休みが終わっちゃう！」

そんな水越姉妹の漫才を華麗にスルーして、その隙に自分の好物をどんどん食べる美佳だった。

昼に起きた耳の激痛はそれから起こることもなく、無事に学園に辿り着けた弘之。吹奏楽部の活動場所がわからなかったから、まずは職員室にいる透の所に向かった。

職員室に入れば丁度よく透が茶を飲みながら一服しているところで、弘之は早速声をかけた。

「ちわつす、白藤先生」

「ん？ああ、岡野。その様子だと部活を見に来たのか？」

「帰るときに眞子と美佳に誘われまして。ま、こっちもきつかけができて良かったですよ」

と、弘之が眞子達を名前で呼んだ瞬間、透の目がキラ〜ン、と怪しく光り、弘之は背中に嫌な汗が流れた。あの目は、…間違いない、遊び（からかい）相手を見つけた時の目だ！！

「ほっほ〜う、もう名前呼び合うとは……。手が早いなあ、

岡野」

「……何言ってるんですか、白藤先生？この大学生活から抜けきってないヤンキー教師が（ボソ）」

「…っ！ ほお〜、小声だったがそんなこと言うのかあ〜、岡野くん。入学当初は成績がピンチで俺に教わってたくせに」

と、透は弘之が言った悪口を持ち前の地獄耳で聞きつけ、額に青筋が浮かべていた。

こうなると、一部の生徒や透の本性を知らない人用（若い女教師）に付けた仮面を被るのを忘れて地を出してしまう透。ヤンキーはともかく、大学生活が抜けきっているとは言えないのは確かだった。

た。しかも、暦の前では言わなかった（使えるネタだったから言わなかっただけ）弘之の過去話を出してきた透に、弘之も力チン、ときて泥沼の悪口合戦が始まった。

「んなつ！そりゃホントに初めの頃だけの話じゃないっすか！そっちだつて前の学校で新人の女教師に……」

「うおっ！くっ、お前だつて後輩の……」

そこから先は売り言葉に買い言葉と、教師と生徒とは思えないくらいレベルの低い口喧嘩が続き、互いの痴話話の大暴露は最終的に白河先生のゲンコツ二連撃を俺と白藤先生が喰らい幕を閉じ、すぐにその場はお開きとなった。（後に、この事が杉並の非公式新聞に書かれているのを見つけた俺は、朝倉さん達風紀委員と白藤先生の合同チームで杉並捕獲作戦を実行したが……結果はいうまでもないだろう……）弘之はまだ学校に来てから何もしていない筈なのにくだくだになったとさ。

透との無駄に疲れたやり取りを終え、（しつかり本来の目的の場所確認はしたぞ？）弘之は音楽室に向かっていた。

透曰く、「今は昼食タイム真っ只中だから、行っても誰もいないかもな？」頭にコブを作りながら言っていたが、楽器持ったまま歩くのも危ないし疲れるし、先に部室を見るのも悪くない、と思つたから音楽室に向かうことにした。

だが、この時、弘之は何処か抜けていた。

誰もいないのな

ら鍵ぐらいかっていることを考えなかったのだ。

そして現在、音楽室前でじっと突っ立っている。端から見れば立派な不審者だ。

他の部員に聞いて開けてもらう、という案が浮かんだが……無理だ。だって俺が入るの知ってるのは眞子と美佳だけだ。いきなり話しかけられても向こうが困るはず。それに俺だって話しかけられない。

などと一人考えながら廊下で待つ。

「……………暇だなあ。暇すぎる。お、そういえば屋上に行ったことなかったな……。よしっ！眺めとか綺麗そうだし、行くか！」

弘之は壁にもたれ掛かるのをやめて屋上に向かった。

屋上の扉を開けた途端、目に飛び込んできた映像を否定するかのように、弘之は扉をすぐに閉めた。…そうだ、今の俺はヤンキー教師のせいで疲れただけだ。うん、そうに違いない！

少し眉間を揉んでマッサージした後、今度はソーツと開けて屋上を除き見る。

……………鍋だ。どっからどう見ても鍋だ。遠目からでも湯気が元気に立ち上って、かなり美味そうだ。

ひとまず、ほんとーにひとまず、屋上で昼を食べてるのは良しとしよう。だが、なぜに鍋！？しかも今日知った顔が二つもある。

あ、片方がこっちに気づいた。

「あ、弘之くん！」

「え？……あ、ホントだ。岡野、もう来たんだ。結構早いじゃない」

「お、おう、美佳に眞子。準備とかすぐ終わったからさ。……それより、ちよつと聞いていいか…？」

「うん？何を？」

「その……何故に屋上で鍋？」

弘之は知り合ったばかりだけど、いい人だと思っていた二人が実は、杉並よりは下？の変わった人だったシヨックを抑え、質問した。

「なんでつて…好きだからに決まってるじゃない！全く、朝倉といい岡野といい、お昼に何を食べてもいいじゃない…」 好きだから！？好きだから鍋を…しかも野外＋屋上で食べるのか！？
…何だろう、この学園に来てからまともな人に一人も会ってないような…はあ…。

「そんなことより、弘之くんも一緒に食べようよ、鍋！良いでしょ、眞子」

「うん、もちろん！材料だってまだまだ一杯あるし、遠慮しないでいいわよ」

そして、段々とそれに慣れていつてる俺…。もうなるようになるね。

「じゃあ少しだけ」

眞子に促され、美佳と眞子の間に座る。対面にはもう一人、制服が違うから本校生だろう人が座って、いや、寝ていた。

「…眞子、この寝てる人は？」 「ああ、紹介が遅れちゃったわね。この寝てるのは私のお姉ちゃんの…」

「水越 萌と申します。よろしくお願いしますね。……
zzz」

「あ、こちらこそ。今日転校してきた岡野弘之です。よろしくお願いします、萌先輩」

「……………」

あれ？

「あの、萌先輩？もしもし！」

「無駄よ、弘之。だってお姉ちゃん寝てるもん」

「え！？嘘！？だって今名前を…」

「寝ぼけただけ。コラ、お姉ちゃん起きなさい！まだご飯の途中でしょ！」

横にぐらぐら縦にもぐらぐら。眞子は容赦なく萌の肩を揺らしまくる。暫くすると

「ううーん？あれえー、眞子ちゃんおはようございますー」

未だ少し寝ぼけているようだが、萌先輩は起きた。てかホントに寝てたんだ。

「はあ、やっと起きた。早く食べないと遅れちゃうわよ」

「はい、わかりました。おや？　そういえば、ソチラの方はどなたでしょう？」

「ハ、ハハハ……（汗）。そ、それでは改めまして。今日転校してきた岡野弘之です。よろしく願いします、萌先輩」

「ああ、そうだったんですか。わたしは水越　萌と申します。こっちにいる眞子ちゃんのお姉さんです。よろしく願いしますね」

「因みに、萌先輩も吹部に入ってるんだよ！」

「楽器は木琴。上手なんだけど、たまあに寝たりしてテンポがズレちゃうのが珠に傷な、私のお姉ちゃん」

「ね、寝るの、演奏中に！？」

「はい、何故か私、歩いているときでも寝てしまうんです」

「……………」

もう一生分は驚いた、と思った矢先にこれか……！　萌先輩、恐るべし……。

「あ、そろそろ時間だ。お姉ちゃん、早く片づけなさい！」

「ああ！　本当です。でも私、まだ食べたりな……」

「はいはい、鍋より部活部活！」

「ああ~~~~！ わ~~~~の~~~~鍋~~~~！」

哀れ、と言うべきか何というか……萌先輩は眞子に首根っこを掴まれて引きずられていく。うん。部活の方が大事でしょ。

と、弘之は判断する。

「ごめん、弘之くんも手伝って！」

「はいよ！」

〃 音楽室 〃

「あ、中には知ってる人もいるかと思いますが、今日は転校生が見学にきています。まあ、本人は入る気満々だから、下見と言っても間違っではないですね。だからといって、変に真面目に、とかはいいいから、自然体で接してやってください。ほれ岡野、後はお前さんだ」

「あ、皆さん、初めまして。岡野弘之と言います。前の学校でも吹部に入っていました。でも、経験者といってもまだまだ未熟なところが多いので、そこはここでみんなと一緒に上手になっていけばと思っています。どうぞ、これからよろしく願います」

パチパチパチパチ

場所は移り音楽室。昼も終わり部員のみんなが戻ってきたところ

で、弘之の紹介が行われていた。

流石に二回目なので、弘之は普通に話すこともできたし、教室でのより圧倒的にましであった。

「ひとまず、今日は楽器も持ってきていることだし、いきなりだけれど練習に入るか？」

「はい。あ、でも合奏とかはまだちょっと…」

「わかってる。今日は一日パート練習だから、同じパートのヤツと交流を深めなさい」

「了解っす」

「あ、あの…」

と、後ろの方で座っていた部員の子が、怖ず怖ずとだが手を挙げていた。

「ん？倉沢さん、どうかしましたか？」

透の態度も弘之とは正反対の丁寧なものに早変わり。まだ仮面を被つとるのかこやつは。

それにしても、この学校の女子のレベルは高い。眞子にしろ、美佳に朝倉さん、ことり。知ってるだけでこれだけの美人がいるんだ。前の母校とは比べようもない。それに倉沢さんだって、長い黒髪を真っ直ぐにおろしてあって、丸く可愛らしい目はまるで日本人形みたいいだ。

「いや、あの…。何か、岡野ちゃんと透先生って仲が良いから知り合いかなあ」と

「ああ、それはコイ…ゴホン、岡野くんが前の学校で同じだったからね」

今更だが、透は二重というか、人によって使う顔が違う。時間が経てばほとんどの人には分かるほどのものだ…。

「しかも、転校時期まで一緒とは、おもしろいでしょ」

「へえ、そうなんだ…」

「倉沢さんはユーフォのパートリーダーをしているから、これが終わったら彼女について行って」

「うむ」

「じゃ、これにて紹介は終了！各自練習開始！！」

パンパンっと、透が手を叩きながらそう言うともみんなはすぐに移動を始めた。前を通る生徒達が皆、

「これからよろしく」とか、「がんばろうな」と声をかけてくれた。そして最後に倉沢さんが俺の前に来た。

「それじゃ、岡野くん、練習しようか」

「うん、改めてよろしく、倉沢さん」

「こちらこそ！」

風見学園の吹奏楽部には、ユーフォは倉沢さん一人だけだった。

先輩達は今年卒業してしまい、倉沢さん一人が残ったというわけだ。

「へえ、岡野くん上手だね」

「それほどでも。これでも前の学校じゃパトリだったんだ」

「ふん」

練習を一緒にするようになって、他人行儀モードの口調をやめた弘之は、新たなメンバーと親交を深めていた。

曲や本の趣味など、意外に二人の気が合いすぐに打ち解けたのだ。

「あつ、そろそろ時間だ…」

「ありゃ、ホントだ。それじゃあ片付けて帰りますか」

「うん、ではそうしましょ」

倉沢さんにつられて時計を見ると、いつの間にか練習時間が終わりにかけていた。話してばかりの練習だったけど、弘之にはとても充実した一時となった。

第七話 顔合わせ 下（後書き）

いかがでしたか？一先ず、これで次の話であるピンクの鮭好きが登場予定です！あ、それと、今回初登場した倉沢さんですが、結局誰にも意見を頂けず名字だけの登場になりました。まああと一話はお出番がないので、気が向いた方がいらしたら名前を感想にでも書いてください。よろしく願いします！

第八話 紫 和泉子 上（前書き）

すみません、テスト週間になってしまいなかなか書けなくて、まだ一部ですが完成したのでアップします。では、どうぞ！

第八話 紫 和泉子 上

弘之が風見学園に入ってから早半月。これといって問題もなく、平和な学園生活を満喫していたとき、とある転校生が来た。

「…スーツの気密も大丈夫ですし、家の回りの遮蔽シールドもよし…。あとは……」

その転校生は、‘全身ピンク色’で、風見学園の女子の制服を着て、何やら右腕辺りを‘爪の生えた’左手で弄りながら公園のベンチに座っていた。

時刻は8時少し前。この島に住んでいる某かつたるい星人は妹から辞書によるステキな目覚めをしたところで、同じく吹部に入っているのにギターまでなっている料理好きで独り暮らしな少年は、弁当を作り終わり学校に向かっていた頃の事だ。

「…視覚妨害用のシールドもちゃんと作動中つと。よしっ！これで大丈夫です、あい！」

一通り弄り終わったのだろうか、そのピンク色で‘クマ’に似た姿をした転校生は、今まで座っていたベンチから勢いよく立ち上がり、

「紫 和泉子、行きまゝす！」

と言うと、元気よく風見学園に向かって走り出した。

〃 桜並木 〃

「うーん、良い天気だ…」

弘之が家を出て少し。今は桜公園の中を歩いていた。

眞子達のお陰か、たったの一日で他の吹奏楽部員とも仲良くなる
ことができていた。

唯一のパートメンバーの倉沢 真木、その彼氏でもあり部長を務
める高野 健二と、この二人とは特に仲良くなれた。もちろん、眞
子や美佳とも。

そして、鼻唄を歌いながら歩いていた弘之は突然背中に強い衝
撃を受け、ゴッツ、とむせた。

「ゲホッ、ゴホッ！な、何だ一体！？」

「あーりやりや、結構きつく入っちゃったか…。ごめんごめん」

むせながらも後ろを向くと、そこには手を振りきった体勢で固
まっている眞子がいた。

「な、なんだ眞子か…。…っていきなり何するんだよ！」

「いやさ、何か岡野の背中見てたらちよつと叩きたくなくて…」

「そんな理由で叩くなー！　　ったく、だから純一達に馬鹿力
って言われる…ん…だ？」

眞子への怒りで我を忘れていた弘之は、自分がとんでもない地
雷を踏んだのを今気づいた。

その証拠に眞子は顔を少し下に向けて、前髪が邪魔で表情がよ
くわからないが眞子の後ろから感じられる黒いオーラから、怒って

いるのがよくわかった。

「あ、あのー眞子さん？もしもーし？」

声は掛けているものの、弘之は眞子からどんどん距離を取っていく…。

「……………岡野……………。覚悟は……………できてるわよね!？」

眞子が顔を上げた瞬間、弘之は全力で逃げ出した。ほんの少だけ垣間見た眞子の顔は、まさしく般若の形相だった。…握りしめていた拳が燃えているようにも見えてしまった。

そんな世にも恐ろしいモノを見てしまったのだから、逃げ出してしまったのも仕方ない…はず。

「待てえええー!!」

そんなことを考えているうちに眞子はじわじわと弘之との距離を詰めていた。その事を理解すると、弘之は足に力を更に加えて猛ダッシュをかける。

「待てと、言われて、待つヤツ、がいるかあああー!!」

だが、叫び返したときに後ろを見たのがいけなかった。何故なら…

「あわ、あわわわわ!ど、退いてくださいまし!危なキヤア!」

近くの脇道から出てきた、長い黒髪をした純和風の女の子と激突してしまったからだ。しかも…

「いつててえ…。あ、悪い！大丈夫…夫…か？」

「は、はい。だいじょうぶです…って、キヤアアア！すみませんすみません！重かったですよ！？すぐ退きますから…！」

弘之は何かにぶつかった、と感じた時、咄嗟に自分の身体が下になるように体を捻って、今の体勢になったのだ。因みに、端から見たら弘之ではなく、黒髪の女の子が押し倒したように見えており、かなり恥ずかしいことになっていた。

「い、いや。俺は大丈夫だから。それより君は？」

女の子が飛ぶように退いてから、弘之も立ち上がり、女の子に声をかける。見た感じでは怪我はしてないみたいだが、そこはぶつかってしまったこちらからのせめてもの礼儀だ。

「あ、あい。私は大丈夫です…。すみません、いきなり飛び出してしまつて…」

女の子に怪我がないと安心した弘之は、突如背後からくる威圧感にはっ、となり、急いで走り出した。

「ご、ごめん！今ちよつと追いかけてるからまた後で…！」

「ごあらあああ…！！岡野待ちなさあああ…！！い！！！」

すると、すぐ後に眞子が走り去っていき、いきなりの展開に和泉子については行けず、その場でしばらくぼか～んとしていた。

〽 教室 〽

朝から眞子とデッドヒートを繰り広げ（ギリギリのところでは眞子がバテて事なきを得た……）体力を使い切った弘之は、机の上でぐでぐでとしていた。

「おいおい、いつもより早く来たと思ったら、何そんなにバテてるんだ？」

と、そんなアメーバのようにダラダラしていた弘之に、工藤が声を掛けてきた。

「はは……。これには海より深く山より高……」

「何、通学路で水越妹と追いかけてっことをしてただけだ」

すると、いつの間にか杉並まで混ざり、弘之の言葉を遮って続きを言ってくれた。

「おい杉並、何でお前はいつもいつも突然後ろに現れるんだ……？」

「ふつ、それは岡野が非公式新聞部に入れば自ずとわかることだ。どうだ…同志岡野？今からでも我が非公式新聞部はお前を歓迎「それはないから」…そうか。」

全く、なんて事を言っただ杉並は。お陰で朝倉さんからとてつも

なく怖い視線を感じるんだが……。

と、いつも通り杉並達とだべっていると、純一も遅刻前に教室に入り、眞子もいつの間にか席に着いていた。眞子と目があつたとき、殺気の籠もった視線をビシビシともらった。

「こりや昼に弁当をやらないと怒りは収まらないな……」

（実はちよつと前、眞子達に鍋を誘われたとき、俺の弁当を分けてあげたらかなり好評で、また今度食べさせてくれと頼まれたりしていたのだ）

こりやあ昼はなくなつたな、と思っていると、いつの間にか暦が教室に入ってきていた。…いつもより早い。

「よし、お前ら席につけ！今日は転校生が来てるんだから急げ！」

暦の一言に教室は一気に騒がしくなつたが、みんなちゃんと席についた。

「微妙な時期の転校だが、みんな仲良くするように！じゃ、入っておいで」

「あい！わかりました！」

暦が扉に向かって言うと、元気な返事と共に一人の‘女の子’が入ってきた。その‘女の子’が入る前に返事をしたとき、弘之はまさか、と思つて扉を見ていた。そして‘女の子’を見た瞬間、弘之はその子が今朝ぶつかった子だとわかりビクリしていた。…正直、あの時また会おう、と言つたものの、名前もわからなくてど

うしようと思っていたが、こんな形でだがまた会えてよかったと思う。

「女の子」は教卓まで進むと、みんなを見回し、背筋を伸ばして

「皆さん、はじめまして！紫　和泉子と申します。不束者ですが、よろしくお願いします！」

と元気に挨拶をした。

第八話 紫 和泉子 上（後書き）

すいません、和泉子ですが、ゲームで付属三年からという設定だった筈……もし違ったら感想に書いてください！急ピッチで修正します！

第九話 あんなに楽しい昼だったのに…（前書き）

ふう、やっと完成した〜！

皆様、前は回は中途半端に短くて申し訳ありませんでした。

この話は和泉子出会い編の第二部となります。一応各キャラとの出会い編を書いてから、本編に入ります。^{カップル}もしかしたらその時は新しく作るかもしれません。

ここでお知らせなのですが、そろそろこの小説のPVが一万を超えるので、記念小説を書くこうと思っています。何かリクエストがありましたら感想にお願いします。

後書き込みの前書きでしたが、長々付き合ってくださいあってありがとうございます。では、本編をどうぞ

第九話 あんなに楽しい昼だったのに…

（何じゃこのカオスは…？）

場所は屋上。春の心地よい日光が降り注ぎ、猫がいたらスヤスヤ眠っているくらい気持ちのいい天気だ。

そんな樂園は今、ちよっとした…いや、かなりヤバイことになっている。

まず、目の前には水越姉妹の鍋がある。それはいい。一緒に昼を食べていたから当然だ。

だが、その水越姉妹か二人とも机に突っ伏している。

そして、俺の隣には同じく机に突っ伏した純一が…。だがこっちは手がピクピクツと痙攣を起こしている。

ああ、俺はどうしてこんな所に来てしまったんだろう…。初めは六人いた仲間は今では三人に。

そして、その原因となった仲間の一人が、次のターゲットとなる俺に狙いを定めた…！！

「あ、あはは…。み、みんな美味しさのあまり気絶？しちゃったみたいですね…。では、次は岡野くんの番ですよ。」

一体何をどう捉えたらそんな解釈になるんだ！？

俺は心の中で叫ぶが聞こえるはずもなく、朝倉さ…、いや、音夢の手料理を食べさせられた…。

） 昼休み ）

時は少し戻って昼休みが始まってすぐ。弘之は朝の事を眞子に謝るため、席を立とうとするが、弘之の前には既に眞子が立っていた。

「ま、眞子！」

「…何よその態度は。せつかく朝のは水に流してあげようと思っただのに…」

「へ？…マジで？」

「……あのねえ岡野、あんた私をどう思ってたんの！？」

「ご、ごめん！！純一とのやり取り見てたから……」

「はあ。まあいいわ。それより昼一緒に食べる？今日はしゃぶしゃぶなんだけ「マジか！？」行く！行きます！行かせてください！」
わかったわかった。でも、今日人数多いからあんまり食べられないから」

「いや大丈夫！俺弁当持ってきたから。後で眞子も食うだろ？」

「えっ、ホント！？もちろん食べるわ！それじゃあ先に屋上行ってお姉ちゃんと準備手伝ってて」

「了解！」

弘之は眞子に軽く敬礼をすると、次の瞬間には廊下に出ていた。

「はやっ！ そんなにしゃぶしゃぶ好きなのか……って、考えてる時間なんてなかったんだっ。おゝい、朝倉く、音夢く……」

そして、眞子も純一達ともう一人を誘うために歩き出した。

く 屋上 く

あの惨劇が始まるまであと少し……。その時の俺は何も知らず、暢気に萌先輩と鍋の準備を進めていた。

「お出汁と胡麻ダレ、野菜に豚肉、コンロに昆布入りのお湯、と……。萌先輩、準備終わりましたよ！」

「岡野くん、ありがとうございますく。やっぱり一人だと大変でして、本当に助かりましたく」

「いえいえ。食べさせてもらうんですからこれくらいは……つと、眞子達来たみたいですよ」

弘之が屋上の扉に目をやると、丁度眞子が純一達を引き連れて入ってくる場所だった。

「おゝ、純一！お前もか」

「……………ああ」

弘之は純一やけにテンション低いな、と思ったが、弘之はそんなに気にしなかった。

そんなことより、純一、音夢と、それで終わりだと思っていたら、その後ろにまだ一人残っていたからだ。

「……………紫さん？」

「ああ！あなたは今朝の…」

和泉子もこつちに気付いたらしく、かなり驚いていた。

「…あれ？何で紫さんが岡野の事知ってるのよ」

「何でって……。俺が眞子におかけられてる時にちよつとなつてか、みんな早く座れよ。鍋の準備終わってるし」

弘之はそう言ってみんなを急かす。相当腹が減ったようだ。

眞子達も同じなようで、すぐに座布団の上に座り、箸を取る。

そして…

「……………いただきます（ゝ）……………」

嵐の前の静けさ、ではないが、惨劇のまえの鍋が始まった。

しゃぶしゃぶもほとんど食べ終わり、皆はお茶を飲んでいた。だが、流石に四人は多かったのか、弘之はまだ食べたりなかった。それは眞子と純一も同じらしく、俺はそこで弁当を出すことにした。

「眞子、純一。お前らまだ喰い足りないだろ？」

「ああ、確かに。でも購買に行くのもかったるいな」

「私もだけど、もう購買は売り切れだろうし、諦めるわ。紫さんと一緒に食べれたからそれで満足だし」

「そっか…。他の人は？」

「私も少し、まだ食べたりないです」

「あい、お恥ずかしながら、私も、少し…」

上から順に萌先輩、紫さんと、やはり足りなかったらしい。最後に音夢を見ると、自分の持ってきていた袋から何かを取り出そうとしていた。

それを見た純一は、凄まじい量の汗をかき、顔色まで悪くなった。

「実は私、兄さん用にお弁当を持ってきたまして、よければ皆さんどうぞ」

と言って取り出したのは、ピンク色の可愛い弁当箱だった。

だが流石に小さく、全員で食べると少ない。そこで、俺は朝倉さんのより大きめの弁当箱を机に置いた。

皆は一斉に弁当箱を見て、驚いたような顔をしていた。だが眞子だけは、その弁当箱を見た瞬間、表情が変わった。

「お、岡野！あんたもしかして、それ……」

「フフフフ……。そのまさかさ、眞子よ。お前が昨日、食べたそうにしていた弁当……そのver・UP版だ……」

この時の弘之を見た全員は、後ろに雷が落ちたような音がした、と後に語ったそうなの……。

「やったあ〜！！岡野、ありがとう〜！」

眞子の喜びよりも凄く、純一は目を丸く見開いて驚いていた。

「というか弘之、料理出来たのか!？」

「そうですよ！初耳です！」

「岡野くんのお弁当、楽しみです〜」

「あやや、人は見かけによらないんですね」

上から純一、音夢、萌、和泉子と、それぞれが思い思いの感想を言う。…つか純一、失礼だぞ。

「ま、それより早く食え。昼休み終わるぞ？」

「お、おう。そうだな。そんじやいただきます」

そう言つて、純一はまず野菜炒めを一口。すると、

「！？　な、何だこの野菜炒めは！　今まで食つたことない味……いや、風味か！？」

「お、それに気づくとは……。実はその野菜炒めには特製のスパイスを使つててな。ま、手製な分香りと風味にばらつきが出ちまうが、今日は当たりみたいだな」

「ほ、本当です！この独特で爽やかな風味、それでいて強烈でスパイシーな香り……！正に銀河一、いや宇宙一のスパイスです！」

「ははっ、紫さん、流石にそれはオーバーだよ。でも、気に入ってもらえて良かったよ」

「あい！」

そんな純一と和泉子に触発され、皆が次々と箸を伸ばしてくる。返ってくる反応は上々で、作った甲斐があるというものだ。

だが、弘之が一人満足している内に弁当が全て食べられてしまった。

これは予想してなかったなあ……。

「ご、ごめんなさい岡野くん！つい夢中になってしまつて……」

「何、朝倉さ……いやもう音夢って呼ぶな？音夢の弁当があるから、それを貰えれば大丈夫さ」

ビシッ!!!

弘之が言った瞬間、純一は箸を持ったままフリーズした。もう
どうかの彫刻かと思う程の固まり方だ。

「……………本気か？弘之」

「？何だよ純一。お前も音夢の弁当が食いたいと？」

すると純一は首を残像が残る位早く横に振った。

「兄さん？？どついう意味ですか…？」

だがそれを見た音夢は黒オーラを純一にぶつけて純一を怯ませ
ていると、

「あー！岡野、独り占めは許さないわよ！一口くらい食べさせ
なさい！」

眞子がそんなことを言ってきた。まあ、一人で食べるには多
すぎるからいいかと、音夢の弁当を眞子に差し出した。

「いついただき〜！」

「では私も〜」

萌先輩まで一緒になってだし巻き玉子をパクリ。瞬間、二人は
肩をビクッ、と一度震わせると、そのまま机にぶっ倒れた。

「え？」

何が起こったのか、脳が理解を拒み、弘之は弁当を持ったまま固まった。すると音夢が、

「もう！ 今日自信作なんだから！食べてみてください！！」

と言って純一の口に玉子焼きに焼魚を放り込んだ。

純一は直ぐに吐き出そうとしたが、音夢に口を塞がれ無理矢理食べさせられ、せして……

「うぐうああああうう……！！！」

と変な奇声を発して机にダウン。

やっと脳が理解し、直ぐ様逃げようとしたが、時すでに遅く、俺は音夢の料理を食わされ意識を失った…、というか冒頭に戻る。

その後、比較的早く目を覚ました水越姉妹は、自分達を含め、何故純一達が寝ているのを和泉子と音夢に聞いたが、二人は乾いた笑いをするだけだったと言っ…。

第九話 あんなに楽しい昼だったのに…（後書き）

弘「…なあ、純」

純「…何だよ」

弘「…俺達昼って何食べたっけ？眞子達のしゃぶしゃぶは覚えてるんだが、ソツから先を思い出そうとすると何故か震えが……」

純「……………」（こっちも音夢の劇物のせいで喋れない）

弘・純「はあ、何かすんげー疲れた……………」

これは、五時限目の放課の二人の会話。

一万ヒット記念！！ D・C・B・B サバイバル！ part 1（前書き）

え、皆様のおかげでこの小説のPVが一万を超えました！！それを記念して、第一弾の小説です。（一応、二万、三万と増えることに一話追加されます！）

はぁ、はぁ、はぁ……

それは、草木も眠る丑三つ時。一人の少年が、人気の全くない校舎を何かから逃げるように走っていた。

はぁ、はぁ、はぁ、…！

冷たいアスファルトでできた床は音をよく反射し、少年の足音と荒い息の音が廊下の向こうまで響き渡っている。

どれだけ走ったのか、少年自身にもわからなくなり、幾つ目になるかわからない曲がり角を曲がろうとする。

だが、その曲がり角の右側に人影がもたれかかっているのを見つけ、少年―岡野 弘之―は立ち止まった。

人影は、弘之が最初からここに来るのがわかっていたように落ち着いており、弘之が立ち止まると、もたれ掛かっていた壁から背を離し、ゆっくりと弘之に近づいていく。

コツ、コツ、コツ、コツ

両者の間には靴音だけが響き、緊張をより高めていく。

すると突然、今まで雲に隠れていた月が顔を出し、廊下を照らし出す。

少し大きめの三日月の光が、弘之と弘之の目の前にいる人物を照らしだした。

自分の予想通りの人物を前に弘之は右手を懐に差し入れ、黒い物のグリップを掴み、いつでも抜けるように構える。ついでに何時でも避けられるように足にも力を入れる。

対する相手は既に両手に得物を持っているが、まだ銃口は地面を向いている。お互いを包むピリピリとした空気は無くなることはなく、どんどんキツくなっていく。だが、そんな沈黙も、両手に得物―銃―を持った人影によって破られた。

「さっさと諦めなさい、岡野…。アンタにはもう逃げ場はないわ。素直に、降伏しなさい……！」

その声は震えており、何か懇願をするようにも聞こえる…。その言葉に、弘之は懷に仕舞ってある銃のグリップをきつく握りしめる。

「…私は……アンタを…部活の仲間を、撃ちたくない…。撃たせないで………！」

弘之は下を向き、暫く固まる。だが…

「……ごめんな、眞子…。俺は、俺達はもう、引き返せないんだ…！ありがとな、情けをかけてくれて……」

弘之は絞り出すようにそう言うと、懷からリボルバーを抜いて構える。

「…そう、それがアンタの答えなのね……。わかったわ」

眞子も両手のデザートイーグルを構え、弘之を睨みつける…！

そして二人は……

「…俺は」

「…私は」

「お前を（アンタを）撃つ！！」

同時に言い放ち、引き金を引いた……。

もの悲しい三発の銃声が、誰もいなくなつた風見学園に響き渡つた……。

時は戻つてある土曜の午後。弘之は杉並に呼び出され風見学園に向かつていた。

丁度やることもなく、ただ自宅でごろごろしているよりかはマシだろう、と判断したからだ。

校門前に着くと、既に何人が集まっていた。

「あれ？純一に音夢、それに眞子、萌先輩、工藤に美春もか？……皆杉並に呼び出されたのか……」

そこには純一、音夢、眞子、萌先輩、美春に工藤と、いつも通りの顔ぶりが揃っていた。

と、弘之がそう呟くと、純一の影から金色の髪が二房見え、それは勢いよく弘之に向かつてきた。

「こらあゝゝ！！何でボクの名前が入ってないの！？岡野くん！」

それは純一の従妹の芳野　さくらだった。どうやら丁度純一で隠されていたらしく、見えなかったのだ。　「ごめんごめん！純一が邪魔で気づかなかったただだよ！」

「……それって遠回しに、僕がチビだっって言いたいのかな？」

「いやいや、そういう訳じゃ……」

「ふう〜んだ!!」

さくらは拗ねてしまい、弘之は取りあえず純一に話を聞くことにした。

「なあ純一、お前も……」

「ああ、杉並からだ。何でも『面白いことをやるから校門前に来い!』って電話で。しかも音夢がそれを聞きつけてな、杉並の監視、と称して付いてきたんだ」

「なるほどなるほど。眞子達もだよな？」

「ええ」「はい」

「……………」

ここでふと考える。杉並がこのメンバーでやりそうなことを……。だが、何も浮かばない。そしてしばらくうんうんと唸っていると……

「やあやあ、諸君！今日は集まってくれてありがとう！」

「おわあっ!!」

杉並が弘之の後ろに立っていた。また気配を消しやがったなコイツ……!

「おい杉並!今度は一体なんだ?休みの日に学校に呼びつけるなんて…」

「それについてはそこいるわんこと白河先生がご説明して下さい」

と、今までずっと黙っていた美春が前に出てきた。暦は校門の影から手にアタツシケースを持って出てきた。…暦先生いつからそこに…。

「え〜と、皆さん。今回集まって頂いたのは……天枷研究所が開発したゲームのテスターをしてもらうためなんですよ!」

「フフ、実は最近な、どっかのバカが新しい研究用に貯めていた研究費用を勝手に使ってしまったってな、急遽資金作りをしなきゃいけなかったってわけなのさ」

「何の研究かは言えないのですが、天枷研究所が総力を決して挑む一大プロジェクトなんです!」

「でまあ、その資金作りに私と透の合作…と言っても暇つぶしのヤツだが、それが所長の目に入って商品化。で、それがこれだ」

といって、暦は手に持っていたアタツシケースを開き、全員に

見えるように出した。

「これって……」

「銃……？」

「その通り！だがコイツはそんなしょそらの辺のエアガンとは訳が違う……！なんと、サバイバルゲーム用の銃だ！！」

うお！白藤先生まで……。そういえば部活以外で見るの久しぶりだな……。それに、この人サバイバルとか戦争系のゲーム好きだったはずだ。奈良この企画に一枚噛んでいても不思議じゃない。

「コイツは本物の銃に限りなく近い構造、重量、デザイン！そして何より、使っている弾が特殊なのだ！！」

しかも杉並まで混ざってる……。

みんなは銃のことに熱く、熱く語ってくる透に、近づきたくないオーラを出しながらジリジリと後ずさっていく。だが純一はシューティングゲーム好きの血が騒いだのか、透と杉並の説明を聞き入っていた。

「米軍が訓練用の弾を売ってくれてな、それを安全に、しかも量産し易いように改良したのが、コレ！！」

と言って、透はポケットから先端が青い弾丸と赤い弾丸の二種類を取り出す。

「こいつらは見た目は9mmのパラベラム弾だが、弾の中身は塗

料で外側を柔らかいゴムでコーティングしたものだ。軍のだとこのコーティング自体が堅くてな、下手したら怪我をするかもしれないからゴムに変更したんだ。でも、元は軍の訓練用。本物の銃弾並みの速度で発射されるから、軽減されているとはいえ、限りなく本物に近い衝撃を体験できる、まさに優れ物！　一応三十弾入りで定価1000からだ。成功次第ではもっとやすくなるかもしれない」

と、純一はその弾丸を受け取って手のひらで転がしてみる。なるほど、確かに弾の部分はゴムになっている。

「話がそれだが、天枷が言ったように今日みんなに集まってもらったのは、その銃の試作品と弾でサバイバルゲームをしてもらっために呼んだんだ。その為にちよつと杉並に協力をしてもらってね。ついでにメンバーはあと三人増える。」

と、ここで弘之は考える。今居るのは自分を含めて九人。追加で三人来るってことは六対六のチーム戦か…。おもしろい！！

実は弘之もこういうガンシューティングは大好きで、自宅にはソレ系のゲームが大量にあるのだ。

「でも、いくら怪我をしないからといっても、私達女子にはちよつと……」

と、これは音夢。確かに、女子にはキツそうだな…。眞子はヤル気満々だが…（汗）

「まあ、朝倉妹や水越姉、芳野嬢には荷が重かるう。…だが、このゲームの勝利チームにはなんと、豪華賞品が出されるのだ！」

その豪華景品という言葉に一同がピクツ、と反応した。

「その賞品とは……初音島温泉一泊二日のペアチケット六枚！家族で行くもよし、誰か気になる相手を誘ってもよしと、使い方の由のチケットだ。まあ、一緒の日に旅行することになるがな……」

その景品に女子陣の反応は凄まじく、眞子はヤル気のパラメータが急上昇。後ろに炎が見える……。音夢は下を向き何やら「……チケットがあれば兄さんと……」と一人ブツブツと呟き、さくらは「お兄ちゃんと旅行だ……！」と跳び跳ねている。

そんな女子陣の反応に満足したのか、杉並と透はうんうんと頷きながら次の説明に入った。

「言い忘れたが、残りのメンバーは白河ことり嬢と紫和泉子嬢。そして皆は知らないだろうが、天枷研究所の紹介であと一人、参加することになっている。白河嬢と紫には既に暦先生から連絡が行っているので安心してくれ。……でだ、最後の一人なんだが、忙しくて今はいない。ゲームが始まる前には来るからその時に紹介するそうだ」

「後、ゲーム開始はご近所迷惑を考慮して夜の七時半、場所は風見学園だ！わかったな諸君？では解散だ。遅れるなよ？」

杉並は一気にそう言うのと煙幕を使い姿を消した。隣にいた透は煙をモロに吸い込み咳き込んでいる。

「……………さて、皆も事情はわかったと思うし、ここは一旦解散しよう。テストをするのは夜だから……そうだな、七時に校門前に再集合だ。以上！」

結局、咳き込んでいた透は無視され、暦が集合時間を皆に伝え

てお開きとなった。：フッフ、腕になるぜ！

弘之は意気揚々と帰っていった。

こうして、俺達は互いのプライドと景品を賭け、第一回ガン・シューティング・サバイバル in 風見学園の開幕が決定した！

一万ヒット記念！！ D・C・B・B サバイバル！ part 1（後書き）

えゝ、いかがでしょうか？次回は二万ヒットを越え次第投稿となります。

天枷研究所が呼んだ人物とは一体！？こうご期待！！

更新が遅れてしまい本当にごめんなさい！実は自分、学校の成績でかなりヤヴァイ点を取ってしまい、追試が待っているという悲劇がございまして…。多分今年度中に投稿できるのはこれが最後になると思います。

それでは、D・C・B・B 第十話、どうぞ！

悲惨な昼も終わり、部活も無事に終えた弘之は夕飯の買い出しにスーパーに寄り、意外な人物と鉢合わせした。

「あや。岡野さん、こんにちは」

それは、今日転校してきて昼も一緒に食べた、紫さんだった。

「こんにちは、紫さん。紫さんも買い物？」

「あい！…ですが…」

と言つて、紫さんは手に持っていた鮭のパックを弘之に差し出し、

「あのー、これどうやって調理すれば……」

……へ？

「あ、いや、その！　じ、実家とかで料理とか手伝ったことはあるのですが、ほとんど切るだけでして……。鮭だ、とかはわかるのですが……」

「な、何だ。びっくりした…。　ってちょっと待った！　紫さん料理できるの…？」

おいおい、何だかデジャブを感じるぜ…。　ってことは、今の紫さんは暦先生以上に危険だな。

「…恥ずかしながら、かなり危ないかと…」

だよな、とか言いつつ、この状況をどうするか、頭の中で考える。そして浮かんだのは一つの案。

「…やっぱりこれしかないか。ま、危ないところはことりに手伝って貰うとして……」

「あ、あの…岡野さん？先程から小声で何を…」

「ん？ ああ、ちょっと料理教室を開こうと思ってな」

「????」

俺の言葉に？を頭の上に大量に浮かべて首をかしげる紫さんを視界に入れつつ、俺はことりを呼ぶために携帯を取り出した。その時の紫さんの仕草は、外見に似合わず子供っぽくて、何だか似合ってるなあ、と思いながら微笑んでしまった。

〃 岡野家 キッチン 〃

「…えっと、岡野くん？ 何で私はここに呼び出されたのかな？確か一緒に料理しよう、って誘ってくれたんじゃない？それにこのキレイで子は？ 説明、してもらえますよね…？」

な、何でことりが暗黒化してるんだ！？しかもこれは、下手したら音夢より怖い…！

「聞いてるんですか、岡野くん！？」

「は、はいいい！-！」

「全くもう…」

弘之の態度にことりはため息を一つ。

「（一緒に料理をしようって聞いたから慌てて来たのに…）はあ、まあいいです。それで岡野くん、何で私を呼んだんですか？」

一先ずこ通りの怒りが収まったと判断し、弘之は少々怯えながらも説明を始めた。

「…なるほど。そういうことなら喜んで協力します！　　とい
うか、最初からそう言ってくださいよ」

こ通りに事情を説明し、快く了解してくれたところで、さつきからリビングで俺達のやり取りを呆然としながら見ていた紫さんに声をかける。

「ってことで、料理教室の先生に、風見学園の歌姫こと、白河ことりさんが加わりました！　ほれ拍手拍手！」

「は、はいい-！」

困惑しながらも律儀に拍手をしてくれる紫さん。うん、ありがとう。

「あ、あの…何で岡野さんはここまでしてくださるのですか？今日だって初めて会ったばかりですし…」

「ん〜、理由と聞かれても…。俺は紫さんの事、友達だと思っ
てただけど…」

「えっ!？」

「それに、一人暮らしで料理が出来ないのはさ、かなりキツイ
からほっとけないんだよ」

「……………」

「……クスクス」

はい、紫さん果然二回目。ことりなんか隣で笑ってますよこん
ちくしょう！

「…だあ〜！　　こうなるから言いたくなかったのに…。
おいこらことり、いい加減笑うのやめい！」

「アハハっ…！　だ、だって、今の台詞…クスッ！　岡
野くんなら絶対に言うと思ってたら本当に言うんだもん。　いや
〜、岡野くんは期待を裏切らないから面白いんですよ！（…だから
ですよ。私がこうしてみつくくんやともちゃん達みたいに話してい
れるのは…）」

ことりの言い分に、なんじゃそりゃ、と思いつきり脱力すると、

「…クスクス」

呆然としていた紫さんが笑っていた。

学校では、笑顔でいてもどこか固くて、今の紫さんにはそれが全くない、自然な表情だった。

そして、その笑顔につられて、俺もことりも紫さんと一緒に笑っていた。

いつもは一人しかいないリビングに、今日は三人の楽しそうな笑い声が響き、とても温かくて、どこかホッとさせる空気がリビングを満たした。

三人は、大体一分ぐらい笑い続けていたが、しばらくするとそれも止み、弘之が本来の目的である料理教室の開始を告げた。

「さて、今日あるのは大根、えのき、豆腐、鮭、後は野菜が少々か…。じゃあ今回は、簡単なみそ汁と鮭の塩焼きにご飯の鮭定食ということで。ことり先生、なにか異論は？」

「うーん……ないっすね。料理が初めてなら簡単なそれで大丈夫だと思いますよ」

よし、ことりのOKも出たところで…

「よし、じゃあ始めるぞ、紫さん！」

「あい！ 岡野さん、白河さん、よろしくお願いします！！」

「まず大根は…ってちょっと！ 皮剥いてから短冊に切らないと…」

「あやや…」

「次はみそ汁の出汁だけど、今回は煮干しで行こう」

「あい、では早速…」

「ダメえくく！！煮干しはちゃんと袋に入れないと！ 味の
ない煮干しを食べることに…！」

「アワアワ…」

「まあ魚を焼くぐらいなら…な？」

「大丈夫です…よね？」

今までの結果、そこまで致命的な失敗は無いし、というか知らなかったから起きたミスだから、教えたからにはもう間違えない筈だ。でも…

「…やっぱり」

「何か起こりますね。あ、焼き始めたみたい…」

ガッツポーズをし、こちらに戻ってくる紫さんに、何か足りないような…と思いながら見てると、隣のことりから視線を感じる。どうやら同じ考えのようだ。

そして、少しずつだが鮭の焼けるいい匂いと脂の跳ねる音が…
…脂!?

「「ああ〜!!!!」」

ことりも同時に気づいたようで、すかさずアイコンタクト!

ことりは頷くと水を取りに蛇口向かい、俺は魚焼き用のオーブンを開けて網を出す。

するとそこには、予想通り水が下に入っておらず、鮭の脂が直接溜まった受け皿が…!

「うわあ、ものの見事に…」

「やったか…。水の音が聞こえなかった時点で気付けていれば…。ま、魚は無事だったから良しとして…。ってやっぱり少し乾燥したか。ことり、水を」

「はいはい」

ことりが差し出した水を少しずつ入れていく。軽くても水蒸気爆発は嫌だからな。水も入れ終わり、鮭をオープンに入れて焼き始める。

「あうあう………（泣）」

後ろを向くと、キッチンの入り口で紫さんが体操座りをしながら

ら泣いていた。

「む、紫さん、気にしないでいいですよ！！今までのミスだつて知らなかったから起きた物だし、もう起きることは無いですから（汗）」

「そうそう。手伝っていただけあつて筋は悪くないし、後は慣れれば大丈夫さ」

弘之とことりの励ましの言葉に和泉子は何とか立ち上がり、（涙目だったけど）また料理を始めた。

）
数分後
）

岡野家の食卓には、一般的に鮭定食と呼ばれる物が三人分並んでいる。もちろん、ことりの分も入っているからだ。

「さて、色々とトラブルはあつたが完成したことだし、食べますか？」

「はい。私、もうお腹ぺこぺこですよ」

「あい。ではいただきますー！！」

そして紫さんは鮭の塩焼きを一口。すると…

「！！こ、これはサモス力ではないですか！？ 何で地球に…」

「サモス力？」

「地球？」

紫さんの謎発言に、俺とことりは揃って首をかしげる。紫さんも自分が何を喋ったのか今になって気付き、なにやらすごく慌てていらつしやる様子で。しかも時折「…初日から条約違反…」だの、「…みんなになんて言えば…」とか言ってるし。つか条約って何さ？

暫くすると紫さんは落ち着いて、だけど何故か真剣なオーラを出しながらこちらを見つめる。あれ？何かこたりの様子が…震えるのか？

「お二方、いきなりで申し訳ありませんが、今の記憶を消させていただきます…ごめんなさい！！」

と、紫さんが言った瞬間、目の前が閃光に包まれた…。

） side 和泉子 （

あ、危なかった…。まさかこんなに早くミスをしてしまうなんて…しかも、友達、と言ってくれた方の記憶を消すだなんて…。仕方がないとはいえ、やはりショックが隠せません。後、あと少しで御二人は目が覚めるはず。…大丈夫…：今度は、絶対にミスなんてしない。

だって…：せっかく地球で初めてできた友達なんだから…記憶を消すなんて事、これ以上、したくないから…。

） side out ）

「…うう。 あれ？」

…俺、何してんだ？ 確か、商店街で紫さんに会って、料理が出来ないからこりも誘って一緒に夕飯作って、それから…紫さんが何かを言って…

ズキン！！

「うッ！ グッ！」

「！？ 岡野さん、どうしたんですか！？ しっかりしてください！！ 岡野さ………！」

そこまで思い出した途端、ソレは来た。登校初日に痛んだ、あの耳の痛みだ。紫さんも突然俺が苦しみ出したせいか、かなり驚いている。心配させてしまったか…。

あれからは一度も痛まなかったから、気のせいだと思って病院に行かなかったけど…うん、明日は部活休んでいくか。

そんなことを考えている内に、今まで一番強い痛みが来ると、ソレは治まった。と同時に、さっき思い出しかけていた内容が、一気に頭の中に現れた。

「ああ、痛かった…」

「だ、大丈夫ですか？突然耳を押さえて倒れられて…。（まさか記憶を消したから？…あり得ない。あれは何度も実験を繰り返して安全性が確立されたモノなのに…）」

「あはは、ごめん。ちょっと前に同じ事があって、でもなんとも無かったから病院に行かなかったんだけど…。こりゃあ明日は絶対に行かないと…」

「そうですか…。気をつけてくださいまし？　何ともない、と思っていたら酷い病気だった、というのはよくある事だそうですから…」

「ありがとう、紫さん。ところで、紫さん。ちょっと聞きたい事があるんだけど…」

「はい？何ですか？」

「さっき言ってた、条約、やら、地球、って、あれはどういうこと？」

「な、ななな何で！？　何で覚えているんですか！？」

あら、凄い狼狽え様。そこまで狼狽えるって事は、確実に何かしたな。記憶操作みたいなことを…。

「さあ？　耳が痛くなったら全部思い出した。それで？　紫さんって一体何者？」

その一言で、俺と紫さんの間に重苦しい空気が流れた。

第十一話　紫　和泉子　下　　く…俺以外に真実を言えるといいな…く

…すみません、タイトルはいいヤツがなかったんです！

だって和泉子だけじゃなにか物足りないじゃないですか！？

まあ作者の愚痴はこれくらいで、何だかんだでもう一話お届けします。

では、十一話、どうぞ！

「…むにやむにや。お姉ちゃん、そんな煎れ方じゃダメだよ。
…むにやむにや…」

そんな中、ことりは記憶を消された影響か、ぐつすりと眠っており、その寝言は二人の重苦しい空気を吹き飛ばすのに十分な威力を持っていた。

「…っはは」

「…クスクス」

二人は顔を見合わせると、吹き出して笑った。そこにはもう、先程の重たい空気も雰囲気も、存在していなかった。

「ま、いいさ。今は話さなくても。紫さんが自分から話してくれるのを待つてるから」

「…あい。ありがとうございます、岡野さん。でも、これだけは言わせてください。私はさっき、ことりさんと岡野さん、御二人の記憶を消しました。その事については、本当にごめんなさい！でも、私の秘密を他の人に知られるわけにはいかなかったのです…」

「…そつか。俺はさっきも言ったけど気にしてないから別にいいよ。それより、早く夕飯食べようぜ？せっかく作ったのに冷めちゃうし」

「あ、あい！わかりました！」

「さて、こちらのお姫さまを起こしますか。…おい、ことり起きろ」

そう言つてことりの肩を揺らす。

「…うん？　はれ？わたし…？」

「食べてる途中で寝ちゃったんだよ。疲れてるならそういえばいいのに…」

「あ、あはは。…ごめんなさい（あれ？　私そんなに疲れてたのかな？）」

「さ、早く食べましょう、岡野さん、ことりさん！」

そして、今度は紫さんも口を滑らせる事もなく、楽しく時間は過ぎていった。

「じゃあね、岡野くん、紫さん！また明日！」

「おう、またなことり。また明日！」

「あい！さようなら、ことりさん！」

夕食も終わり、気づけば時計の針は八時を指していた。これ以上長居するのはまずい、との事で、みんな今日は解散となり、ことは近所なので見送りだけして、俺は紫さんを送るために外に出ている。

そして今、俺は桜公園の中にあるベンチに缶コーヒーと紅茶を片手に歩いている。ここまでの道中で、紫さんが「さっきの事を説明したい」と言い、なら温かいものを飲みながらという流れになったのだ。

「お待ちせ。はい、紅茶」

「あや、ありがとうございます。 … あったかい」

「それは何よりで。 よいしょ… っと」

俺はそう言うつと紫さんの隣に座る。

互いに何も喋らず、ただ静かに時間だけが過ぎていく。桜の花びらだけが舞い躍り、後から後から落ちてくる花びらは幻想的で、この島に来てから全く変わっていない。まあ、二、三ヶ月しか経っていないからそう感じるのかもしれない。

「………… 岡野さん」

「ん？」

紫さんも、やっと話す覚悟ができたみたいで、ぽつぽつとだが、話を始めた。

「………… 実は私………… 宇宙人なんです」

「……マジで？ UFOに乗ったり、生体サンプルの為に牛とか人を捕獲したり、果ては侵略の為に来たというあれか…？」

食事の時の台詞から、そんなんじゃないかなー、とか思ってたけど、やっぱり面と向かって言われてもそう簡単に信じられる内容じゃないな、これは。

「…はい、本当です。詳しいことはお話しできませんが………
つて！ 岡野さん、貴方は宇宙人を何だと思っているのですか！
？ 確かに昔はサンプル採取の為に地球に来た異星人もいたそうですが、今ではそんな不効率な方法はしていません！ それに、私は侵略に来たのではなく、地球の文化を学んでレポートを書くために来たんです！ 侵略者じゃないんです！」

「ご、ごめんごめん！！謝る！謝るから！！」

どうやら、一般的な宇宙人に対するイメージを口走ったところ、あまりにも実態が違いすぎたせいか、紫さんが軽く怒ってしまった。
…と言っても頼つぺたを膨らませて怒る顔は、怖いと言うより可愛いだな。なんか子供っぽいし。

「全くもう…！ あ、そうだ岡野さん。岡野さんは何で記憶消去が効かなかったのですか？」

「いや、俺に聞かれても…。というか、記憶消去ってあの光のこと？」

「あい…。あの技術は随分前に確立された物でして、成功率は限りなく100%に近いんです…。それが何で……。そういえば岡

野さん、耳を押さえて苦しまれていましたが大丈夫ですか？」

「うん？ああ、あれか。今はもう痛みも無いし、大丈夫さ。…
…もしかしたら、アレが原因で誤作動が起きたのかもな？」

「そうですか……」

お互い話す内容が尽きてしまい、押し黙る。ただ、その沈黙は重い物ではなく、どこかすっきりとしたものを含んでいた。

多分、紫さんは少なからず後ろめたい思いをしていたのかもしれない。自分の正体を隠すため、会う人全てに嘘をつく。それは、会ってたったの一日しかたっていない俺だけど、わかる気がしたんだ…。

「私、そろそろ帰りますね岡野さん。ここまで送っていただいてありがとうございます」

「わかった。それじゃあ紫さん、また明日」

「あい！ ……あ、そうだ。岡野さん、ちょっと待って下さいー！」

ベンチから立ち上がって帰ろうと弘之が後ろを向くと、和泉子が慌てた声で呼び止める。

大きな声だったせいか、弘之は驚きながらも振り向く。

「ど、どしたの？」

「あい。ここまで知られてしまいましたし、岡野さんには本当の姿を見せてもいいかと思ひまして…」

「…本当の…姿？」

「あい！ 岡野さんには今、私は長い黒髪の女の子に見えている筈です。ですがそれは、私が機械を使って皆さんに見せているもの何です。それで、明日から岡野さんにだけそれを解除します。同じクラスですし、すぐわかると思いますよ」

「へえ。因みにその本当の姿とやらは？」

「それは見てからのお楽しみです！ それでは！」

そう言つと、紫さんは桜公園の中に消えていった。

俺は紫さんの後ろ姿が見えなくなるまで、紫さんを見送った。

〵 翌日 〵

そして翌日。あれから俺はすぐに家に帰り布団に入った……。のはよかったんだが、紫さんの話が強烈すぎたせいか、中々眠れなかった。

お陰で睡眠量はいつもの半分以下。はつきり言つてかなり眠い…。純一ではないが、正直今はかつたるいぜ……。

俺は今、‘誰もいない’通学路を一人で歩いている。いやあ、流石に朝の七時ちよいじゃあ誰もいないか…。そして学校の教室へ。

通路路と同じで誰もいない。俺は最後の力を振り絞り、自分の机に座ると同時に突っ伏して眠りの世界へと入っていった…。

ガヤガヤ ガヤガヤ

「…んあ？」

何やら周りがつるさいと思って目を開けると、目の前には楽しそうに眞子と美佳が会話をしていた。

目が覚めたときにあげた変な声でこちらに気づいたのか、眞子が話しかけてきた。

「あ、岡野やつと起きたんだ」

「およ？ あ、ホントだ。おはよー弘之くん！」

「あ、ああ。おはよう、眞子、美佳」

「教室に入ったら岡野が爆睡しててビックリしたわよ」

「だねだね。他の子に聞いたら弘之くんが一番だ、って言うからわたしもビックリしたよ」

そう言って弘之に話しかける二人だったが、弘之には二人の話など全く聞こえていなかった。そう、自分から見て左側の列に、ピ

ンク色の何か' が机に座り、楽しそうにクラスメイト達と談笑していたからだ。談笑しているクラスメイトは何も気にする様子もなく、その' ピンク色の何か' と話し続ける。その様子を見て思い出す。あの席は……

「……何だ、あのピンクは…!」

「は?ピンク? あんた何言ってるの?」

「うゝん、弘之くん、まだ寝ぼけてますね?早く顔を洗ってくるのをオススメするよ」

弘之の呟きは、眞子達にばつちりと聞かれていたようで、二人からとつても冷たい視線をいただきました。

「……そうだ、俺は寝ぼけてるんだ。うん。顔洗ってくる」

そして教室を出てトイレで顔を洗う。冬は抜けたとはいえ、まだ四月の下旬。まだまだ肌寒い日が続く、水も凍るように冷たい。お陰で目が覚めた。

「あ、戻ってきた。目は覚めた?」

「おう! ばつちし目は覚…めた…ぜ…?」

あれ?と思い目を擦る。そして開ける。そこにはクラスメイトと話が終わったのか、一人机に座り教科書を読んでいるピンク…いや、和泉子の姿があった。

「…なあ、眞子」

「何よ？」

「紫さんって長い黒髪だよな？」

「は？確かにそうよ。あんなキレイな髪、見たことないわ…」

うん、昨日紫さんが言った容姿と一緒にだ。

「今日だってほら、あっちで教科書読んでるよ」

美佳が指差す方を見れば、それはやはり紫さんの席で、そこにはピンクの何かが座っている。…やっぱしあれか。

そうと判れば即行動。俺は席を立ち、いきなりの動きに驚いている眞子達をスルーし、むらさ…いや、和泉子の後ろに立ち、一声。

「おはよう、和泉子さん」

「あ……。お、おはようございます、岡野さん！」

いきなり名前を呼ばれてかなり驚いてしまったようだが、それでも和泉子はちゃんと弘之に挨拶を返してくれた。

その事に満足しながら、これから先和泉子さんが俺以外に秘密を話せる人可以かといいと、そう思った。…にしても…

「熊か…。後ろ姿で何となく動物だとはわかっていたが…その顔は……プッ！」

「ああ〜！　今笑いましたね！？笑いましたよね！？　それに私は……クマじゃないんです〜！！！」

和泉子の叫び声の後、教室には目が眩むほどの閃光が起き、その後には和泉子の叫び声を忘れたクラスメイトと、耳を押さえ悶絶している弘之が残り、クラスの奴らから冷たい視線を頂きましたとき。

第十一話　紫　和泉子　下　　…俺以外に真実を言えるといいな…

すみません、何かちょっと最後とかグダグダだし和泉子の秘密云々が無理矢理だったような…。自分の実力不足がよくわかりました。これからはこんなことがないよう努力していきます。それでは、よいお年を！

第二二話 病院で…（前書き）

えゝ、今回主人公はほとんど出てきません！！申し訳ありません！！

ですがその代わり主人公について結構重要な話になるので是非読んでやってください。（因みに正月編は季節に合わせる為に突貫で書いてしまったので、これは正月より前になります）

第二二話 病院で…

） 水越病院 （

気温が程好くなってきた五月の初旬、俺は今病院のお世話になるうとしている。部活やら何やらで延びに延びてしまったが、この前和泉子に「目からビーム」（記憶消去。弘之命名）を喰らった時と、始業式の日に起こった耳の激痛を調べるためだ。

いやまあ、正直ここまで延びるとは流石に予想外だったさ。そろそろ行こうかと思ってた矢先に、珍しく父さんの方から電話があって、その時に近況報告ついでで耳を話したら怒鳴られた…？ しかも左の方が酷いと言った途端、夜にも係わらずに。

で、今日俺は休日を潰して病院にいる、と。因みに部活は無い。

改めて病院の中を見渡す。院内の待合室では老若男女たくさんの人が談笑している。見た感じ俺と同じ年位の奴はいな…お？

「純一か？」

「ん？ お、弘之。どうしたんだお前、何か病気か？」

「ああ、ちよつとな。それより純一こそ……。ってそうか、お前成績最悪だからついに頭を診てもらいに…」

「…ちよつと待て。いくら何でもそれはないだろ！！」

「はいはい、わかってるから。それより病院で大声出さない。周りの人に迷惑だろ？」

弘之の言う通り、周りに座って待っている人たちから冷たい視線を受けている。多少なりとも弘之の方にも向いているような気がするが勘違いだろう。うん。

「はあ……。それより、病気かって聞いたら頷いてたが、本当にどうしたんだ？」

「いや…只春に耳がおかしくなつてな。父さんにばれたら大目玉で……。それでさつさと水越病院に行け、ってことで俺はここにいます（そついや、何で父さんは水越病院に行けって言ったんだろ…）」

「そうか……。無理はすんなよ」

「ありがと。それで純一は本当にどうしたんだ？ お前が病気に掛かっているとは考えにくいんだが…」

「ああ、音夢だよ、音夢。あいつちつさい時から身体が弱くて、しょっちゅう病院の世話になってるんだよ。俺はその付き添いだ」

「なるほどなるほど。音夢なら納得だ。」

「…おい」

「気にするな。他意はあるから」

「あるんかい!!」

そしてまた周りの皆さんから冷たい視線。今度は二人揃っておとなしくなる。

そして待つこと数分。後ろから聞き慣れた友人の声が聞こえてきて、純一も弘之も一緒に振り返る。

「兄さん、お待たせ……って、岡野くん！？ どうしてここに……」

「よつ！ 俺はちょっとした病気の検査だよ。それより大丈夫か？ 純一から聞いたけど身体が弱いつて……」

「あ、はい。大丈夫ですよ。今日だって定期検査みたいなものですし、心配無用です」

「……まだ弘之の前では猫被るか（ボソ）」

「お兄様？ 今何かおっしゃいましたか？」

弘之はそんな仲睦まじい兄妹の間を邪魔しないため、そさくさとその場を後にする。するとそれに気づいた純一が悲鳴に近い声で弘之に待ったを掛けた。

「お、おい弘之！ 何処行く気だ！？」

「……いや、二人の仲睦まじい雰囲気壊すのはやぶさかだと思つて……」↑裏音夢の雰囲気怖いだけ

「な、仲睦まじい……／＼／＼」

『49番でお待ちの岡野様、岡野様。第二診察室へどうぞ。繰り返します……』

と、弘之にとっては天の助け（？）ともいうべきタイミングで呼び出しがかかった。た、助かったぜ…。

「じゃ、じゃあお二人さんm俺はこれで!！」

「ま、待て!弘之! 逃げるなあゝ!！」

「……………はっ! 兄さん、覚悟!！」

「ぎゃあああああ!！」

……………純一の絶叫を聞きながら俺は診察室に急ぐ。死ぬなよ、純一……………。

「うゝん、検査したところ、やっぱり問題は見られないわねえ……………」

今、俺は聴力検査や様々な検査を終え、診断を受けているところだ。まあ結果はごらんの通り原因不明。担当医の石田先生とともに頭をひねる。

「うゝん、岡野さん、小さい頃に耳の病気にかかったことはない?」

「……………えっと、父さんに聞けばわかるんですけど……………」

「あれ？君は知らないの？」

「……実は俺、小さいときの記憶が無くて……。すみません」

「……詳しく聞いても？」

「はい、大丈夫です。俺の一番古い記憶って、小四の頃なんです。その頃には本島で生活してて、それ以前に何処に住んだとか、母親の顔とか、全然覚えてないんです。父さんに聞いてもはぐらかされちゃって……」

弘之の話に石田は一字一句聞き漏らさないよう、真剣に耳を傾ける。

「……ということは、岡野くんは全く知らない、と……」

「はい……」

「んー、それじゃあ仕方ないか……。お父さんと連絡が取れて、何かしら病気にかかっていたようならもう一度ここに来てください。よし、それじゃあ薬出しとくね。一応痛くなつた時用の痛み止と、もしかしたら耳に細菌が入ったからかもしれないから化膿止めと、それから……」

この後、石田医師から薬の数々を処方され、いくら病気とはいえげんなりした弘之だった……。

「えーっと？　あの患者さんはこれで大丈夫で、あの人は…
っと」

石田は、午前の診察を終え午後の担当医と交代し、今は水越病院の中にある中庭で休憩がてら午前に来た患者のカルテをチェックしていた。

「次は…あ、岡野くんか」

次のカルテを手にとると、それは午前の患者の中で一番気になっていた弘之のカルテであった。診察の時は病気の欄や健康状態の欄しか見てなくて、年齢など気にしていなかった。だが、今なら気になる。どれどれ…。

「…年齢十四、風見学園三年、か。眞子ちゃんと同じ年か…」

「眞子ちゃんが、どうかしましたか？」

カルテを読むのに集中していたせいで、いつの間にか隣に座ってカルテを覗き込んでいた人物に気付くことができなかった。

というより、こののほほんボイスは…！

「萌ちゃん！　いきなり声をかけないでよ！ビックリするじゃない…」

隣に座っていたのは、水越病院院長の愛娘であり眠りの木琴の異名を持つ水越萌だ。萌ちゃんは、時々病院の手伝いで一緒になることがあり、すぐに仲良くなった。ちなみに眞子ちゃんもその時に友達になった。

「ごめんなさい。でも、石田先生が何かを真剣に読んでいて、気になってしまいました…」

「気になってって…？　一応プライバシーとかあるから覗かない！眞子ちゃんに怒られるよ？（と言っても今からバラしちゃうけど…ま、いっか！）　それより萌ちゃん、ちょっと聞きたいことがあるんだけど…」

「はい、わかりました。私で答えられることなら何でも聞いてください」

「ん。ありがと。実は今日、岡野くん…って子が診察に来ただけで、知らない？」

「…………え？　岡野くんが…ですか…？」

萌は驚きと困惑が丁度混ざり合ったような微妙な表情を浮かべていた。これは…

「萌ちゃん、知ってるの？」

「はい。岡野くんは同じ吹奏楽部のメンバーで、眞子ちゃんとは同じクラスのお友達です。それより、岡野くん、どこが悪いのですか？」

萌の不安そうな瞳で見つめられ、石田は、ここまでどんぴしゃで当たるとは…と後悔していた。

「だ、大丈夫大丈夫！ちょっと検査しただけだから！　それに検査でも悪い結果はなかったし…！」

「そうなんですか！それは良かったです！」

「（セ、セーフ…。危なかった…）うんうん、いいことだよ！それじゃ萌ちゃん、私仕事あるからこれで！！」

「はい、それではまた」

萌ののほほんボイスを聞きながら、石田は脱兎の如く中庭から逃走した。

） 休憩室 （

萌ちゃんから逃げ出すことに成功した私は、一番近くにある休憩室で息を整えている。結構全力で走ったからバテたバテた。喉も乾いて来たので、自販機からスポーツドリンクを買う。

スポーツドリンクのブルタブを開け、一気に煽る。そこで、休憩室の入り口から私を覗いている人影に気づいた。あれは……！

「い、院長！？」

「やあ石田くん。いい飲みっぷりだ。あれだけ中庭と廊下をダッシュすれば喉も乾くだろう」

げ、見られてたのか！！

「こ、これには事情がありまして…！」

「ハハ！　そう焦らなくても怒ってはないよ。…次はないが…」

次はないって…完璧怒ってるじゃないですか！？

院長の最後に呟かれた一言に恐怖していると、いつの間にか反対側の椅子に院長が腰かけていた。…何故？

「で、どうしてあんなに走ったのだ？君らしくない」

「いえ、その…萌ちゃ…娘さんに今日来た患者さんのこと聞いたら知り合いでして…その…」

「何とか誤魔化したが居ずらくなつてここに来た…と…」

それより誰なんだい、娘の知り合いとやらは」

「あ、はい。岡野　弘之という、来年風見学園の本校に上がる男の子で…」

「岡野……眞子と同年…まさか…」

「？　院長も岡野くんを知っているんですか？」

「いや、何年も前だが、昔この島出身の子を治療したことがあってね、その時に治療した子と同じ名前なのだよ」

「……単なる偶然…じゃないんですか？」

「うむ。まあ、そうだろう。因みに、その時の病だが、原因不明の聴力低下だね。治療をしてもまるで効果無し。今はどうしている

のやら……。 おっと！今日は大事な会議だったのを忘れていた！
！ 私はこれで失礼するよ」

「あ、はい。 ありがとうございます！」

そして水越院長は休憩室を出て行き、休憩室は静けさを取り戻した。そして、そんな静かな中、今の院長の話を振り返る。

（院長の言っていた『岡野くん』は聴力低下。こっちの岡野くんは謎の痛み。 共通するのは原因不明という点だけ……。 うーん、関係あるのか無いのか……）

「あー！！石田先生見つけましたよ！！！！」

「ふえ！？」

静かだった室内に叫び声が響き、思わず変な声を出して驚いてしまった。入り口を見ると、そこには若いナースが仁王立ちで立っていた。

「『ふえ！？』、じゃありません！！ とつくに休憩時間終わってますよ！！」

「………… ああぁー！！ ホントだ、ごめんなさい！！」

「いいから早く診察室に！ 患者さんが待ってますよ！？」

「す、すぐ行きますって伝えておいて！！」

慌てて休憩室を飛び出し診療室を目指してまた走る。その時、弘之と昔の『岡野』の事は石田の頭から忙しさの余りに記憶の片隅に追いやられてしまふのだった…。

第十三話 初詣（前書き）

あけましておめでとつぐざいます。季節もの？です。では、お楽しみください。

第十三話 初詣

「おおおお〜ん

おおおお〜ん

一年中桜が咲いてる初音島。その島の中にある唯一の神社、胡ノ宮神社は今、たくさんのお参拝客で溢れている。神社の境内ではたくさんのお店が並び、小さな子供が親に綿飴をねだっていたり、カッブルで腕を組みながら歩いたり、島中の人が集まっているのでは…、と思うほどの混み具合だ。

そして今、俺は一人で初詣に来ている。相も変わらず叔父夫婦は家には帰っておらず、異動先の家で楽しく過ごし、父親も父親出張先から帰ってこない。まあ、首が掛かっている仕事だし、何かこの前のメールで「仕事にトラブルがでて更に遅れる」って書いてあったし、まあ今年は一人で年越し+正月迎えだな…。

そして、今は一月一日。元旦だ。願掛けは混んでるから後にして、今は屋台の食べ物を見ている。お、焼きそば。旨そう…。

「おっちゃん、焼きそば一つ！」

「はいよ！ ほれ、四百円な！」

「ありがとう」

そして焼きそば片手にまた境内をウロウロ。すると…

「お！弘之じゃないか！」

「ん？ ああ純一か！明けましておめでとう！」

「こっちこそ明けておめでとう！ 因みに俺だけじゃないぞ？」

「岡野くん、あけましておめでとございます！」

「何だ、音夢も一緒だったのか。相も変わらず仲がよろしいことぞ……」

「「えっ！？」」

いやらしい、というか下品？な笑みを浮かべて言えば、二人は揃って赤くなる。…チツ、いちゃつきやがって。

「ま、邪魔者はこれで失礼しますか。 じゃな、二人とも！ よいお年を！」

そう言っ二人から離れてまた境内を歩くことにした弘之。この分だと他のメンバーとも会えるかな…とか思ったそうな。

一方、純一達はしばらくその場で固まっていたそうな…。

そして、また境内の中を歩いていると……

「やつほー、岡野！」

「岡野くん、あけまして、おめでとございます〜」

今度は水越姉妹と出会った。二人とも振り袖を着ており、いつもとは違う雰囲気、弘之はぼー、と眺めてしまった。

「あれ、岡野くん？　どうかしましたか？」

「はっ！　す、すみません、ちょっとボンヤリしてまして……」

「もしかして私たちの姿に見惚れたとか？」

「う……！　ま、まあいいじゃんか、そんなこと！　それより二人とも、早くお参りしてった方が良くないぞ？　今は空いてるけど、すぐに混んできるぞ？」

「あ、ホントだ！　お姉ちゃん、早く行こ！」

「ああ、眞子ちゃん、引つ張らないでください。では岡野くん、また後で！」

「あ、はい、眞子も萌先輩もまた後で！」

弘之は心の中で危ない危ないと思いながら水越姉妹を見送り、そろそろ自分もお参りに行きますか、と思つて前を向くと、視界の端に神社の社務所が入り、そこに見馴れた赤い髪の少女と、見馴れないショートボブの黒髪の純日本！　という感じの女の子が、二人揃つて振り袖を着て、仲良くおみくじを引いていた。

まだ新年の挨拶していなかったなあ、と思い出し、行き先を社務所に変更した。

「うん…、よいしょ！」

私はことりより先におみくじを引き終わり、今はことりが引いてるのを見ている。そんなに大吉を引きたいのか、何回も筒を振っている。…そんなに振ったって大吉が出るとは限らないのに。でも、その姿は可愛らしく、つつい笑ってしまった。

「あゝ！叶ちゃん笑うなんてヒドイよ！」

「フフ…！　ごめんごめん、何だかことりのやり方が可愛くてつい…」

「つい、じゃないっすよ！　あ、出た。おじいちゃん、三十七番お願いします！」

「はいよ。…ほれ、お嬢ちゃん。ありがとうね」

「いえいえ、こちらこそ。　って事で叶ちゃん、おみくじ見せ合おう！」

「うん…！それじゃ」

「「せ」の…！」

そしてお互いのおみくじを見せ合う。すると…

「あ、やった、大吉！」

「わ、私は小吉……。なんて微妙な……？」

「ま、まあまあ。こんなこともあるよ。それより内容は……と。
何々？『あなたが隠していた秘密が危ないかも！？その危機は
あなたのすぐ後ろから！』……だって」

「な、なんだかすつごくリアルだね、そのおみくじ……」

「うん、確かに……」

内容が内容なだけに、下手に無視ができず、私はことりと一緒に
その場で考える。

おみくじの事でここまで悩むなんて、しばらくしてから思い出
すとかかなり恥ずかしいこととしてたんだなあ、私達。

そして、ここで考えているのがいけなかった。

今日は元旦ということで、お婆様から特別に男装をしなくても
いいと言われて、周りに注意が行っていなかった。

「おーい、ことり！あけましておめでとう！」

……岡野くんが近づいているのに全く気づけなかったんだから……。

二人が楽しそうに話しているせいか、俺が近づいているのに全然気づかない。俺はその事に少し悲しくなりながらも、ことり達に声をかけた。

「おーい、ことり！あけましておめでとう！」

「え！？」

「っ！？」

声をかけた途端、二人の体が跳ねるように動いた。ことりは直ぐに周りを見回して俺に気づき、酷く慌てたようにしている。…何でさ？

「お、岡野くん！？何時からそこに…」

「さっき二人でおみくじを見せ合ってるところから」

その言葉にことりは更に焦り、叶は冷や汗を流す。どうにかしてこの状況を打破しようと思えるが、その間に弘之が叶に声をかけた！

「…で、さっきからずっと後ろ向いてる君は？ことりの友達？」

「っ！…」

「そ、そうなんですよ！でもこの子人見知りで…」

「あ、そうなんだ…。それは悪いことを…。じゃあ俺、そろそ

ろお参りに行ってくるから。じゃな、二人とも」

「う、うん。バイバイっす」

「……（ペコリ）」

叶は声を出さない代わりに頭を下げる。弘之は無視されている訳ではないとわかり、それを嬉しく思い、

（それにしてもさっきの子……どっかで見たことあるような……ま、いつか！ことりの友達ならまた会えるだろうし……）

そんなことを考えながら二人の元を去っていった。

） side end （

（それにしてもさっきの子……どっかで見たことあるような……ま、いいや。ことりの友達ならまた会えるだろうし……）

ことりは弘之の心の声を聞いて少し安堵する。ギリギリだが、弘之には気付かれなかったことがわかったからだ。

「よかったね、叶ちゃん。岡野くんバレなくて……」

「……………うん」

「…やっぱり、辛いよね。友達に嘘をつきながら過ごすのは…」

「…でも、仕方ないよ。お婆様…現当主の言いつけは守らないと…」

「……何とか、なればいいんだけどね……」

「………うん」

二人の間には、正月に似合わない暗い雰囲気の流れていた…。

「…さて、何でお前がここにいる、杉並？」

「はて？何の事やら。俺はただ初詣に来ただけだが？」

参拝客の列に並んでいると、いつの間にか隣に杉並がいた。…初めて会った時から思うのだが、コイツほんとは忍者か何かか？

「ふ、残念だが俺は忍者ではない」

「人の心を読むな！ってか惜しいのかよ！？」

「まあ落ち着け。それより前に進め、後ろがつかえているんだ」

「お、おう…。（杉並に常識を注意されるとは…）」

そうして並ぶこと数分。すると…

「あれ？岡野も並んでたんだ…」

「ん？あ、眞子か。あれ？さっき並びに行ってたんじゃない…」

「いや、お姉ちゃんが出店の出し物に引かれちゃって。置いてきちゃった」

「置いてきたって、お前…」

「大丈夫大丈夫！……多分。それより岡野は一人でお参りするの？」

「いや、そこに杉並が…ってあれ？」

横を向くと、杉並の姿が消えていた。さっきまで居たのに…。

「誰もいないじゃない。…しょうがないわね、一緒にお参りしてあげるわ」

「え、いいのか？」

正直、一人でお参りするのはかなり寂しい。何だかんだ言っても父さんも初詣には一緒だったから…。眞子の申し出はかなりありがたい。でも…

「萌先輩は？一緒に初詣に来たんじゃ…」

「美佳も一緒だから問題なし！それにまた並び直すのも面倒だし、いいじゃん」

「面倒って…。お前は純一かい！」

「な！？何でアイツが出てくるのよ！／＼／」

眞子は顔を赤くして言い返してくる。これはもしかや…

「眞子、お前もしかして純一のこと…」

「わー！　わー！　わー！　ア、アンタいきなり何言い出すのよー！」

眞子よ、その反応はアタリですと言っているようなものだぞ。

「ま、頑張れ！　お、次俺たちの番だぞ？」

「あ、ホント……じゃなくて、違っただってばー！」

そんな眞子をスルーしてお参りを始め、眞子も渋々ながらも弘之にならい二回手を叩き一礼。その後祈った。

弘之は眞子が純一に好意を持っていると知り、何故か心がざわつく思いを感じた。

第十三話 初詣（後書き）

実はこの小説、ゲームの本編までいったら完結します。そこからはヒロイン別のルートでいく予定です。

そしてそろそろ、そのヒロインの一人目を決めたいのですが…、皆さんのアンケートを取りたいと思います！

前回同様、感想に書くかレビューの所をお願いします。では！

二万ビット記念 D・C・B・B サバイバル! part 2 (前書き)

ちょっと早いですがパート2です。それと初詣の一話前が最新話です！

二万ヒット記念 D・C・B・B サバイバル！ part 2

） PM 6：50 校門前 ）

今、校門前には昼に集まっていたメンバーに加え、ことり、和泉子の二人が加わっていた。

「ちわつす、朝倉くん、岡野くん！今日は負けませんからね！？」

…ことりはもうやる気十分だ。対する和泉子は至って普通。いつも通りに鮭おにぎりを食べている。…心なしか和泉子の目がいつもと違うような……。

「…ふふふ。鮭食べ放題……」

……。

弘之は現実逃避気味に周りを見回す。昼の皆は既に集まり終わり（何故か美春と音夢は野戦服に……。杉並もだが気にしない）、今現在十一人。…あれ？

「なあ、美春。天枷研究所（お前ん家）からく来るスペシャリスト？ はまだなのか？」

「あれ？？確かにそうですね。でも、美春も詳しいことは教えてもらえなくて……」

「なるほど、なら仕方ないな。待つか」

「そして待つこと十分」

「ほう、まさか集合時間の三十分前にして全員揃っているとは、感心感心！」

「確かに！俺達が創ったこのゲームをここまで楽しみにしてくれるとは……！」

暦と透は、スーパーの裏で見るとな台車に大量のアタッシュケースを載せやってきた。因みに服装はいつもと同じ白衣と着崩したスーツだ。

「それより暦先生、午後に言ってた人は一体どこに？」

そう言っただけで質問してきたのは純一だった。なんだかんだ言っただけでもシューティングゲーム好きが疼くのか、かなりワクワクしている。もしかしたら、この面子の中で一番楽しみにしているのはコイツなのでは？

「ああ、そうだったね。じゃあ紹介するよ。晶？」

「はいはい。そんなに声を出さなくても聞こえてますよ、透兄さん」

透が校舎に向かって叫ぶと、またしても校門の裏から人が出てきた。……ここには秘密の通路でもあるのだろうか？今度杉並にでも聞くか……。

「皆さん、初めまして。俺は時空か……ゴホンツ！ 失礼。天枷研究所から派遣された……ってか依頼された西本 晶です。よろしくお願いします！」

そして晶―時空管理局L級次元航行艦‘アームド’所属の空戦魔導師―は、純一達に一礼した。

晶はその後すぐ純一達と自己紹介をしている中、透が（嬉しそうに）晶の紹介している。……と言っても聞いている人は暦以外いないが。

「コイツは俺の弟みたいなもんでな、久しぶりに帰ってきたんで誘ったんだよ。しかも天枷研究所に顔が利いたときは驚いたねえ！」

「それで兄さん、俺は何をすれば良いんです？ 確か新型の銃の試射だと聞いたんですが……（つたく、久しぶりの休暇だということに……。ま、ユーノ達に会ってから暇だったから別に良いが）」

と、晶は周りいる純一達を見回す。まあ、こんなメンバーがいて試射も何もないだろう。困惑しているのがよくわかる。

「……あれ？確かに新型のエアーガンの試射を頼んだぞ？そっちのメンバーもテスターだし……」

「……ちよつと待て……。何でエアーガン如きの試射に俺が呼ばれなきゃならないんだ！？ 兄さんだって俺の仕事知ってるだろ！？ 休暇がもらえる難しさも……！」

「あ、あはは……。ま、まあ気にするな！終わったら終わったで何か奢るからさ、な？」

「……………わかった。その代わり寿司食い放題な！」

「ぐっ！！わ、わかったよ……………」

「…おっほん！！その二人、いい加減始めたいんだが……………」

「「は、はい！！」」

そんな義兄弟の仲睦まじい？会話は暦のドスの効いた声により静かになった。

「ではチーム分けだが…面倒だからこっちで決めてきた。これがそうだから皆確認してくれ」

そう言つて暦は一枚のA4用紙を取りだし皆に見せた。どれどれ？

） チームA ）

岡野 弘之

西本 晶

朝倉 音夢

紫 和泉子

芳野 さくら

水越 萌

） チームB ）

朝倉 純一
工藤 叶
杉並
水越 眞子
天枷 美春
白河 ことり

となった。…ふむ。

「白藤先生、このメンバーだとBチームが有利じゃない？男子は二対三だし、女子に関しては眞子が向こうにいると…」

「なに、安心しろ同志岡野よ。非公式新聞部の情報によると、そっちに行った西本殿は従軍経験があるようだ。そこら辺の事を考えての事だろう。ですよね？白藤先生」

相変わらず杉並の情報の早さに驚かされつつ、晶の意外な経歴にみんな驚いている。

見た感じ俺達と同じ年っばいから、軍隊に入っていたとは到底思えない。

「す、杉並…お前何処からそうゴツ!？」

「ハ、ハハハ…」

…だが、今の白藤先生の反応を見る限り本当の事だろう。晶も殴ってるし。

「うーん、なら大丈夫かな。よし、そんじゃいっちょ始めますか!…!」

A チームは付属校舎に。 B チームは本校校舎につき、開始の合図を待つ…。そして…

「おっ！ー！」

各々は願いを銃弾に込め、戦いへと赴く。勝利の女神は、はたしてどちらに微笑むのか…？

第一四話 桜の木の下で…（前書き）

すみません、自分がテスト週間＋進級のピンチでして暫くは投稿できなと思います。かなり短めですが、どうぞ！

第一四話 桜の木の下で…

「暇だ……。暇すぎる…」

初詣から二日後の一月三日。弘之はやることもなく自宅でダラと過ごしていた。

部活も正月休みで無いし、課題の類いもすべて終わっている。…こうして一人で生活していると、本当に寂しいと思うときがある。仕事であり家に居なかった父さんでも、正月は二、三日ぐらい休みを取ってくれてたっけ…。今ではそれもありがたく思えてしまうとは、重症だな。うん。

ピリリリッ！ ピリリリッ！

「ん？ メールか…。誰だろう？」

ポケットにねじ込んでいた携帯を取り出し、画面を開くとメールが来ていた。

「えーと…。何だ美佳か。何々…。『今日のお昼に、花より団子に集合！！眞子と真木、部長も誘ってるから絶対来てね！次いでにお金忘れないように』か…。どうせ予定もないし、行くか！」

今は丁度11時。花より団子は学校からそこまで離れてないからすぐに着く。時間も余るし…。桜公園にでも寄ってこよう。久しぶりにあの桜も見たいし。

そして弘之は部屋に置いてある財布を取り、玄関もしっかり施

錠して家を出た。

） 桜公園 枯れない桜 ）

家を出て十分と少し。知り合いとは誰とも会ったこともなく、目的地であつた一番大きな桜に来ていた。

開けた場所に一本だけ立っているのに、その存在感は圧倒的だ。周りに咲いている桜なんかでは見劣りしているようで比べようがない。

桜に近づき、その幹に手を当てる。不思議なことに、この桜は昔から知っているような気がして、とても安心する。こう、心がポカポカして……って、ヤバイ。何だか眠く……。

頭を何度も振つても一向に無くならない眠気。時間が経てば経つほどどんどん強くなっていく…。

やがて、弘之は膝を着き、ゆっくりと地面に倒れ付した…。

） 花より団子 眞子 side ）

… 集合時間を過ぎてから五分。アイツは一向に姿を見せない。
美佳もちやんと、「返信が来て、行くて言ってたよ！」って言う
てるし…… ホント何してんのよ、岡野のヤツ…。

「岡野くん、遅いね？」

「だな。いつもならアイツ、こういう時は一番で来そうなのに
…。 水越は何か聞いてないのか？」

「うん、何にも。 連絡すら来てないわ」

「…もしかして、何かあったのかな？ 例えば事故とか急な
‘病気’とか…」

ツ！ 病気…。 そうですね、お姉ちゃんが岡野のこと、何か
言ってたような…？

「眞子、どったの？ 何か顔が青いような…」

「まさか、何か心当たりがあるの？ 眞子ちゃん」

「……実は年明けに、岡野が家の病院に来たみたいなの。その
時お姉ちゃんが担当の先生と話してわかったことなんだ…」

「えっ？ それってもしかすると、かなり危ないんじゃない？」

「だな。 もしそれが原因なら、ここに来る途中で倒れたの
かもしれない…。 よし、弘之を探そう！」

「あつたり前よ！」

「うんうん！」

「うん、健二！」

「ひとまず全員バラバラになって探そう！ 確か弘之の家は島の南側にある住宅街だった筈だ。そっち方面に向かって探すぞ！」

こうして、岡野と親睦を深めるための昼は岡野搜索に成り代わった。もし見つかって何ともなかったら酷い目を見せてやる！ そう思いながら、私は勢いよく花より団子から離れ桜公園に向かった。

） 桜公園 ）

あれから数分。みんなは桜公園を中心に岡野を搜索していた。携帯電話は直ぐに連絡できるように手に持ち、各々桜公園を駆け回っている。

通学路としていつも通っている道。…いない。

お姉ちゃんとたまに食べるクレープ屋の辺り。…いない！

噴水がある広場。……………いない！！

「はあ、はあ、はあ……………」

見つからない……。一体何処に居るのよ、あのバカは！

ピリリリッ ピリリリッ

悲惨な結果の前に絶望しかけたその時、右手で握りしめていた携帯が震えた。

慌てて番号を確認すると、それは美佳からだった。

「美佳っ！ どうしたの、岡野見つかったの！？」

『ううん…、ごめん。私達さつき合流したんだけど、桜公園の外回りには居ないって…。今眞子はどこ探してるの？』

「今は噴水前よ。これからもつと奥の方に行く予定…。みんなは岡野の家に行ってもらえない？もしかしたら自宅で……. というのもありえるから」

『……だね。 わかった。私たちは岡野くん家に行くから、眞子もし見つけたら連絡してね！』

「わかった！ それじゃー！！」

ピッ！

ふう、と息を吐き、乱れた呼吸を整える。 大丈夫、まだアイツが倒れたとは決まってる。どこかで寄り道してるだけだ。そうに違いない！…そう何度も心に言い聞かせる。

でも、何で岡野のことになるとこんなにも焦ってしまう？ここまで焦ったのは、いつかお姉ちゃんと買い物中にはぐれた時ぐらいだ。

……ダメだダメだ！！今はこんな事を考えるな！早く岡野を捜さないと……！！　そう言えば、アイツが転入してくる前、桜公園の奥でユーフォが聞こえてた…。真木に聞いたら違うと言っていたし、まさか……。

私は、もう藁にも縋る思いで、以前ユーフォの音に誘われて歩いていった道を走る。

僅かに踏み固められた道。周りは桜の木ばかりで、この道から外れたら迷子になってしまうかもしれない。

やがて、視界の先を覆い尽くしていた桜の木は無くなり、一本の大きな桜を中心とした広場に出た。

この島に住んで、これほど立派な桜は見たことがない。あの時は、直ぐに曲が終わってしまったこともあり直ぐに引き返してしまったから、こんな立派な木があるなんて思いもよらなかった。

そして、ゆつくりと大きな桜に向かって進む。

段々と大きくなっていくその幹は、私が二人いてやっと抱きかかえられるぐらい大きい。一体、この木は樹齢何年なのだろう？

すぐに木の下に着いた。周りを見渡す。やはり、ここにも居ない…。当てが外れて美佳達と合流しようと桜に背を向けようとしたとき、視界の端に足が見えた。

慌ててそちらを向くと、やはり足がある。ゆつくり、ゆつくりとさつきまで居たところとは反対側に向かう。

心拍数が上がる。だんだんと全体が見えてきて、白いスニーカー、青いジーパンに同じ色のシャツがわかった。そして……

「……………お、かの…………？」

桜の木の下で、その場でピクリとも動かない岡野を、見つけた。

第十五話 夢の中で…。(前書き)

テストから復活しました!! 長らくお待たせして……え、待ってない?

そんなことは言わずに見てください、第十五話!!

第十五話 夢の中で…

「……ん？　ここは、どこだ…？」

弘之が目を開けると、まず最初に見えたのは桜のピンク色。だが、空というか、空間が違った。

「……おかしい。いくら寝過ぎたとしても夜になっていたとしても、何で星がないんだ？」

そう、回りは真っ暗だから夜だと勘違いしそうだが、空には星はおろか月がないのだ。確か、新月はこの間なっただけだから、月がないのはおかしすぎる。それに何より…

「この桜自分から光ってるのか…。雰囲気はあの大きな桜と同じだけど、コイツはどこかが違う。　…ホント、何なんだよここは…」

桜は自ら光り、回りは桜並木が埋め尽くし、空は月と星々がないう。夢だとしても、ここまで意識がはつきりしているのは……ん？　顎に手を当ててうんうん悩んでいたら、いつの間にか目の前に数枚の花びらが舞って…いや、浮いていた。それぞれバラバラに舞っているが、他の花びらは地面に落ちていくのに、コイツらは全くそんな素振りを見せない。

試しに、一番近くを舞っていた一枚に手を伸ばす。すると、花びらは待ってました！と言わんばかりの勢いで手に突っ込んで来た。そして、手に触れた瞬間、視界が歪み、目の前が真っ暗になった…。

また目を開けると、そこはさっきまでいた桜公園だった。
どういう事だ？と思い、後ろを振り向くと、子供がいた。

まだ小学生だろうその男の子は、ランドセルを背負って公園を歩いていた。

その後ろ姿に、何故かデジャブを感じながらも声を掛けた。

「オーイ、そのの僕！」

「……………」

無視されてしまった。仕方がない、今度はもう少し声をだすか。

「オーイっ！　そのの、僕！！」

…やっぱり無視され…いや違う。聞こえてないのか？

もう一度公園を見回す。噴水の近くにあるベンチには年寄りからカップル、親子連れなど、たくさんの人がいる。なのに、今の大声に誰一人反応しないのは、おかしいを通り越して不気味だ。でもやはり…

「俺の声は聞こえてないな、間違いない。…つと?!」

するといつの間にか、後ろから来たのであろう犬を連れた男性が、俺を‘通り抜け’た。

そして男性は何もなかったみたいに歩き去り、俺が声を掛けようとした男の子の横を通りすぎる。

その時、男の子は犬に興味を持ったのか、犬の方を見た。そして、その横顔は……

「…昔の…俺？」

そう、その顔は紛れもなく俺の顔だった。

「な、何で俺がここに！？俺、初音島に住んできた記憶なんて無いのに……っ！」

そして気づく。これは…

「…無くなってた、昔の記憶…なのか？ってか俺、初音島に住んでたのか…？」

意外な事実困惑している内に、昔の俺はどんどん桜公園の奥に進んでいく。こんな不思議というかわけわからん所にいるんだし、もしかしたら昔の事を思い出せるかも…。よし、ひとまず追いか！

そして俺は、子供弘之の後を追いかけ始めた。

） 眞子side ）

目の前に、誰かが倒れている。いや、寝てるのかな、こんな良い天気だし…。

私は、散々走り回った後、もしかしたら、という思いで以前ユ

「フオの音が聞こえた辺りまで来ていた。そしたら、大きな桜の木の下で、顔は見えないけどそいつが見た岡野が着ていた服と同じものを着ている人が横になっていた。」

ドクン、ドクン、と、心臓の音がうるさい。さっきまで聞こえていた風の音も、鳥の囀りも、今は聞こえない。いや、今は目の前の人物を見ることに集中すぎて、周りが全くわからない。

一步、また一步と近づいていく。地面を踏みしめているはずなのに、その感触がわからない。

気づいたら喉がからからに渴いていて、唾を飲み込む。頭には最悪な事態ばかりが思い浮かぶ。

あの人は寝ているのではなく、倒れているのでは？急な病気かなにかだろうか？そして、倒れているのが……岡野だとしたら……？

「っ！（違う！そんなことあり得ない！いつもあんなに飄々とした奴が倒れるもんか！　そう、あそこで寝てるのは別人！！たまたま岡野と同じ服を着ているだけ！！）」

首を左右に思いっきり振り、今の考えを振り払う。そして気付けば、見えなかった顔が見えるまで後一步という所まで来ていた。

重く、足が鉛にでもなってしまったかのように、重たい一步を踏み出した。

「……………ウソ……。岡野……？」

倒れている人は間違いなく岡野だった。

「お、岡野、何こんなところで寝てるのよ、さっさと起きなさい

よ！」

岡野の肩を掴み、揺らす。けど、ピクリとも反応しない。

「…ねえ、さつさと起きなさいよ！　ねえ！！」

さつきよりも強く、激しく揺らす。揺らした反動が、岡野の体
が上向きになる。岡野の顔は寝ているように穏やかだが、何か違和
感がある。…何で？

そう思って改めて体全体を見回して…見つけた。胸が、上
下していない。つまり、呼吸をしていない、ということは…

「う、嘘よ…！　ねえ岡野、いい加減寝たふりなんて止めな
さいよ！！ねえ！？起きてよぉ！！」

「……………」

「イヤアアアアアアア——！！！」

真子の悲痛な叫びは空に虚しく響き渡った…。

） 真子 side out next 弘之 side ）

あれから数分。弘之少年（小さい自分）は公園の道から外れた

並木道の方を歩いてた。小さな獣道みたいな所を迷いなくどんどん進んでいく。子供ながら、活発な奴だったんだなあ、と何処か他人事のように考えながら、小さい自分を見失わないよう必死で足を動かす。暫くして気づいたのだが、ココにきて体力の消費が激しいとわかった。初めはそれでもなかったが、今では息切れを起こしていてキツイ。

（でも、この道、あの桜に繋がってる、道？）

これもそうで、追いかけるのに必死で気づかなかったが、この道は大きな桜の木に繋がる道だった。今はもうすぐで桜が見える所ら辺で、小さい自分は既に桜に向かって駆け出したのか、今は見えない。

最後の体力を使い、桜の広場に出る。そこには、桜の下に座っている自分と、ショートカットの髪の同年代（小さい自分の）と思われる女の子が、向かい合うように座っていた。

小さい自分はその女の子と楽しそうに話していて、遠目から見てもわかるほど笑いあっていた。

（誰だ？あんなに仲良さそうにしてるなんて。それに、あのショートカット、何処かで……ん？）

女の子の事を考えて少し目を離れた隙に、先程まで笑い合っていた二人は今は悲しそうな表情をしていた。一体何だったんだ、俺？あ、しかも女の子置いて逃げ出しゃがった！！

「な……んで……」

……あれ？この光景どこかで見たような……。それにこの声、アイツに似てる？

「どうして……なにも言わずに…いつちゃうの…？」

俺は、その言葉を聞いた途端、俺の足は自然と女の子の方へと歩を進めていた。

何故かと聞かれても答えられない。本当に無意識だったからだ。ただ、敢えて言うなら…放つとけなかった…のかもな。今は違うけど、泣かせてしまったのは昔の俺だ。だからかもしれない…。

あつという間に女の子の側に着いた。まだ泣いている女の子の頭に、触れられないとわかってるのに、手を置いてゆっくりとなる。

「安心して。俺…あの子は無責任な子じゃない。何の理由も無しにこんな別れ方をする筈はないよ」

聞こえないにもかかわらず、慰めるように、語りかけるよう柔かな言葉遣いで言う。そして、女の子の頭をなでていると、自然とこの言葉が口から出ていた。

「だから、泣き止んで？」

「まーちゃん、」

俺がまーちゃんと言った瞬間、女の子はこちらを見つめ、一言、こう呟いた。

「ヒロ……？」

と。そして、まーちゃんの手と固まって動かない手が触れた、と思った途端、俺は強い力で引つ張られ、目の前にあった桜が遠ざ

かっ
てい
く。
それ
と同
時
に俺
は意
識を
手放
した
…。

第十五話 夢の中で…。（後書き）

後一話ほど続くかと…？

番外編 音夢料理改良計画（前書き）

……ごめんなさい！！長い間投稿ができなかったです…。

言い訳にしかないのですが、部活の定演とかイベント行事が続けて襲ってきたのです。時間がなくて…。

前話の続きも全然で、今回は和泉子編から書き溜めていたこれを投稿します。

それでは、どうぞ！！

番外編 音夢料理改良計画

〽 屋上 〽

秋。それは四季の中でもっとも過ごしやすい季節。食欲、芸術、読書、居眠り……。気温も暑すぎず寒すぎずを保ち、ぶどうや柿、いろいろな食材が旬となる素晴らしい季節に、俺達は屋上で鍋を食って……。いた筈なんだが……。

「……………（これまでの人生回想中）」

「……………（目の前の光景を必死で否定中）」

「……………（zzz）」

「……………（ガタガタブルブル）」

「ア、アハハ…ハハ……（汗）」

…皆さん、固まっていっちゃるよ。一人は寝てるけど…。

原因は、間違いなくこのブツだろう。グツグツとおいしそうな音を出し、元気一杯に湯気が上がっている鍋………「だった」モノ。

「ど、どうしたんですか皆さん？早く食べないと、お鍋が煮詰まってしまうですよ？」

「……………音夢。ならお前がこれを一番に食ってみろ」

「え？ 別に良いですけど…」

そして、鍋をこんな惨劇…いや、殺戮料理に仕上げた張本人が闇色に輝き妖しく渦巻いている鍋に箸を入れ、奇跡的（？）にも原型を留めていた白菜、えのきを掴み、口に運んだ！！

「モグモグ、モグモグ…（コクリ）。 なんだ皆さん、全然普通じゃないですか」

「『『『嘘だあああ！！！！』』』」

俺と眞子、そして誘ってしまった工藤と純一はきれいにハモった。いや、仕方ないっしょ？ あんな劇物食って平気でいられるのを見たら、叫ばずにはいられない。てか工藤、お前の叫び声って女みたいだな…。

…そしてすみません、音夢様。あなた様を侮っていました。もう俺は貴女をまともだとは思えないでしょう。これ、工藤も思ったんじゃないだろうか。

「！？ おい音夢、お前の味覚は大丈夫なのか！？こんな怪しさ満天の料理、よく普通に……………あ」

純一の奴、墓穴掘りやがった。哀れな…。

「ど、何処が怪しさ満天ですか！？ 普通です！兄さんも食べてみればわかります！！」

と言つて、鍋から具をどんどん取り出し純一の皿に入れていく音夢。…あゝあ、みるみる純一の顔が青くなつてくよ。自業自得だ

ぜ、純一。

「な、なんでこんなに入れるんだ！？味を見るなら一口分でいいだろうが！！」

「絶対においしいから、お代わりする手間を省いただけです！それより兄さん、どうぞ、食べて、下さい！」

ああ、最近見てなかったけど、裏寝夢の降臨だ。純一、死ぬなよ……。

皿を押し付けられた純一は助けを求めるように周りに視線を送るが、みんな目をそらす。それで観念したのか、それとも義妹の手料理を残さないためか、純一は息を吸い込むと目をつむり、皿の中身を掻き込んだ。

「……………あれ？普通の鍋だ……………」

驚いて純一に逸らしていた視線を戻すと、何事もなかったかのように出汁をすすっている純一の姿があった。

「あ、ありえん……！この色だぞ、闇色だぞ！？」

「そう思うなら食ってみろよ。ほら皆も」

そう言っただけで純一は闇鍋を全員の小皿に入れて、差し出してくる。全員恐る恐る手に取ってソレを眺める。……臭いだけならさつき食べてた普通の鍋と変わらない。

そして全員アイコンタクトで一斉に食べる。

.....。

「普通だ」

「普通だな」

「普通ですね」

「普通じゃない」

上から順に俺、工藤、萌、真子の感想だ。

「うーん、確かに変な風味は残るけど、食べれないことはないわね」

心配していた味が大丈夫だったので、皆どんどん箸を進めていく。数分もしない内に鍋は空になり、昼放課も終わりがけだったのでみんな急いで教室に戻った……途端、惨劇が起きた。

席について教科書を取り出そうとした時、視界がグニヤリと歪んだ。だんだんとうねりが大きくなり、教科書を取るため屈んでいたせいでそのまま床に倒れてしまう。

体を起こそうにも、力が全く入らず、ただ呻くことしかできない。しかもそれでさえできなくなってしまった。

『な、何が…？ やっぱり…音夢の料理の…せいか…？』

その直後、後ろと右の席、前の方でも人が倒れる音が聞こえたような気がしたが、そんなことを聞いている余裕などはなく、直ぐに意識は刈り取られた。

後にこの事件は、風見学園謎の鍋食中毒事件、として半世紀以上も語り継がれることとなったのだった！（by杉並）

） 朝倉家 リビング ）

今、朝倉家のリビングに家主の二人を含めて四人の人間が集まっている。カーテンも全て閉められ、灯りは各々が持つロウソクだけ…。

「……さて諸君。今日集まってもらったのは、他でもない。…
…音夢の料理だ」

音夢の反対側に座っている影——弘之——は重々しい声でこの暗黒会議の議題を言う。その議題に、事前に知っているはずの音夢は眉尻を上げ、純一ともう一人の人影は深く頷く。

「あの鍋…いや、遅効性毒物Nは、ここにいない仲間を含め五人という甚大な被害を出した。…ただ、この劇物の製造方法が、ただ、出汁を足そうとしただけ、という間抜けなような話であるが、一番怖い。何はともあれ、この劇物が二度と世に出されないため、ここに『音夢料理改良計画』の発動を宣言する！」

ダンッ！

「ちよつと！ 何もそこまで大袈裟に言わなくても良いじゃないですか！！ 第一なんですか、人が作ったものを毒物やら劇物…果ては生物兵器なんて、酷すぎます！」

弘之が宣言した直後、その張本人である音夢が机を叩きながら文句をいう。…が、誰も音夢を援護しようとはしない。

「諦めなさい音夢。アンタの料理の腕は朝倉から聞いてたけど、ここまで酷いとは想定外だったわ…。いつもなら庇ってあげたいけど…」

そう言つて最後の一人——眞子——は音夢から視線を逸らす。今まで何も語らなかつた純一も、やつと重い口を開いた。

「…なあ音夢、これはお前の為なんだ。今のままじゃお前、お嫁に行ったとき旦那を殺しかねないんだぞ？ 俺は義理の兄弟が死ぬのなんて見たくない。皆もそれを心配してきてくれたんだ。それに、俺は音夢のちゃんとしたうまい飯を食つてみたい…」

「に、兄さん…／＼／ ……わかりました。私、やります！！そして兄さんにおいしいご飯を食べさせてあげます！！」

「音夢……」

「兄さん……」

そして朝倉兄妹は二人の世界へ………つて、この兄妹は……！
ってかコイツらホントに兄妹か！？恋人にしか見えん…。

「あー、そのバカップルもといバカ兄妹。いちゃつくのมေးいが場所考える場所を！」

「うつ！ す、すまん／／／」

「ぐ、ごめんなさい…／／／」

流石にこれ以上見せつけられるとムカついてきたので二人を止める。全く…！

それより……

「（なあ、純一。音夢の料理だが、いつもこうなのか？）」

「（ああ。一応練習してるみたいなんだがな…。見かけは良くなっただが味は変わらず……ハア）」

純一を呼び寄せ事情を聞くと、音夢の料理の腕は春から全くいゃ、見た目が良くなった分より質が悪い代物に成長したようだ。

このままだと純一の体は持たないだろう…特に胃が。ふむ、和泉子以来だけど久しぶりやるか！

「よし、決めた！！ 純一、今日の晩飯、お前家で食うから。ちなみに作るの音夢ね」

「ちょー！？ 弘之お前、何言い出すんだよ！ 晩飯を家で食うのは問題ないんだが、何故作るのが音夢なんだ！？」

「に、兄さん！何もそこまで…」

「悪いが音夢、今回ばかりは援護できん。マジで危ないから。」

そして純一、安心しろ。作るのは音夢でも俺が教えながら作らせるから（ま、スペシャルが二人ほど来るかな？）」

「お前が？…なら安心だな。 音夢、弘之にしっかりと教えてもらえ！！（俺の命の為に！！）」

「え、でも「気にすんな。それに、純一に食べさせるなら美味しいほうが良いだろ？」……はい、ならお言葉に甘えて！」

「よし、じゃあ材料は俺が用意していくから、二人は家で待っていてくれ。因みに代金は割り勘な」

こうして、第一回音夢殺人料理補完計画が実施される事となった。

） 朝倉家リビング（もとい愛の巣） （

「っておい、今ここを良からぬ解釈をしなかったか！？」

「何のことやら。それよか、準備はいいか？」

「……………食材も調理器具も準備し終わってる。後は音夢を待つだけだ」

ふむふむ、ここまでは順調と。後はあいつらを待つだけか。

ピンポン

お、来た来た！

「ん？誰だこんな時間に…」

そう言っでリビングを出ていく純一の後をばれないようについていく。ククク。驚くがいい純一よ！俺が連れてきたスペシャルゲストを…！

「こんにちわ、朝倉くん！」

「やつほー。何だか大変そうだから手助けに来たわよ！」

そう、ことりと眞子だ。最初は和泉子を誘ったんだけど、バイトがあるとかで来れなかったんだ。代わりに眞子を誘ってみたら、快く参加してくれた。（その時、「岡野なんかに負けられるモンですか…」とか聞こえた気が…」ま、ことりは知ってるけど眞子の料理は鍋だけだったから結構楽しみなんだなこれが！

「こ、ことり！？　それに眞子まで何で！？」

「だから、言ってるじゃない。『大変そうだから手助けに来た』って」

「それに、誘ってくれたのは岡野くんですよ？　聞いてないんですか？」

「ひーろーゆーきー？何で先に言わねえんだ！？」

「ん？ 何って……ビックリ？」

「疑問を疑問で返すなー！！」

おお、今日の純一ツツコミが鋭いな。そのかわり息切れしてるけど。

「まあまあ。言わなかったのは悪かったけど、あの殺人料理を何とかするには俺一人じゃ荷が重すぎる。つかできん。だから助っ人を呼んだんだよ」

「わ、私は別に朝倉のために来たわけじゃ無いんだからね！？ 音夢のためよ、音夢の！」

「アハハハ…（眞子も素直じゃないんだから…）」

「さて、ここで駄弁ってるより早くやろう。…それでは、ミッシェンスタートー！！」

「「「おー！！」「」」

「 キッチンもとい居間 」

「さて音夢さん。ここには人数分の材料がある。メニューは力

レーだ」

「岡野くん、私はカレー作れ「あれをカレーと呼べるのか？」
……。」

「とまあ、純一はこう言ってるわけで、今からカレーの作り方を一からきっちりみっちりしっかりと教えます。しっかりメモを録るように！」

「は、はい！」

「ね、音夢……？何で野菜の皮剥かないの？」

「え？だってお魚でも皮があったほうがおいしいから……」

「……………」

「眞子、まだ始まったばかりだ。気をしっかり持て！」

「待て、何で水にそんなスパイスを入れるんだ！？ ルーもあるんだからいらないだろ！？」

「だ、だってこの前のテレビで、カレーの味は家庭それぞれって……………」

「それはインド（本場）の話だあゝ!!」

ゝリビングゝ

「……純一、お前の苦勞がよくわかったよ。アレは和泉子以上だ……」

「そうか……。和泉子が誰かはわからないけどわかってくれたならそれでいい……」

色々なトラブルはあったものの、無事にカレーは完成し、今は煮込みに入っている。

「はあゝ、疲れたゝ。音夢が料理できないのは知ってたけどここまでは……」

「そうっすね……」

食卓では音夢を除いたメンバー全員が、揃いも揃ってグタゝとしていた。……ん？

「…おい、音夢は何処に行った？」

「「「!」」」

その言葉で全員はハツとなり、慌てて音夢を探す。…まさか……

…！

「みんな、カレーできましたよ？」

弘之は身体をガバツと起こしてキッチンに駆け込み、音夢がお玉でかき混ぜているカレーを見る。キッチンには食欲を誘う美味しそうなカレーの匂いが漂っていて、危険は無さそうだが……。

「…おい音夢、そのカレーに何かしてないよな？」

「むつ、何ですか？ ただ焦げないようにかき混ぜていただけじゃないですか！それより早くお皿に盛りましょう」

「……………」

まあ、完成されたカレーに何かしても大丈夫だろう。…多分。リビングでダウンしている純一達を呼び、あつという間にカレーが食卓に並んだ。みんな何だか言って腹減ってたんだな…。

「んじゃま、いただきますか。いただきますす！！」

「……………」

パクッ

全員が揃ってカレーを頼張る。

……………。

「……………うまい。うまいぞ音夢！！」

「やった！ やりましたよ兄さん！！」

モグモグ。 うん、隠し味のコーヒーとりんごが効いてて美味い。流石は俺流みんなも喜んでるぜ。

「へえ…、このカレー変わった風味だけどおいしいじゃない！」

「期待どおりの味です！」

ほらこの通り。

「お、この‘サラダ’、なんか見た目もきれいだし美味そうだな」

ん？サラダ？ ……んなの作ってたっけ？

「あ、本当です！綺麗ですね」

俺が首を傾げているうちに、純一、眞子、ことりの三人は‘見た目はすごく綺麗な’サラダを食べた……瞬間、皆目を回して倒れてしまった。

「お、おい！？」

「ぐッ……。弘…之、音夢の腕、上がって、ねえ、ぞ…」（パタッ）

「あ、味が…辛かったり甘かったり酸っぱかったり……」（パタッ）

「ね、音夢の事、見くびって、いました……」（ドサッ）

結論。音夢が調理中は見張りをつけましょう。じゃないと死にます。

「に、兄さん！みんなー！！」

音夢の悲鳴を聞きながら、弘之は冷や汗を流していた…。

番外編 音夢料理改良計画（後書き）

カレーにコーヒールとリンゴを入れるあれ、自分は結構好きなヤツなので良かったらお試しください。そして今回、新しい試み？として下に書いてみました。何かあれば感想にお願いします。

純「おい弘之、何で俺達がここにいるんだ？」

弘「知るか！大方作者の奴がネタ切れでやった突発的な企画だろうな。ま、突発的故にこれつきりかもしれないがな」

純「そうか……にしても、音夢の料理更に改悪されたな」

弘「…言うな。音夢は手先は器用なのに、何故か料理に変なことをするんだよなあ。それさえなければカレーみたいに美味いはずだ」

純「そつか……。ま、可能性があるだけマシと思うとするか」

弘「そうそう……っと、そろそろ時間だな。それじゃ、これからもD・C・B・B・をよろしく！」

純「そういえば、作者の奴がPV三万人突破の番外編を急いで書いてたから、もうちょいかかるみたいだな。んじゃ、またな！」

三万ヒット記念D・C・B・B・サバイバル！

part3（前書き）

PV三万人突破！ありがとうございます！

短いですが、その分次の話は長くなる（筈？）なのでご容赦を！！

三万ヒット記念D・C・B・B・サバイバル！

part 3

） 付属校舎Aチーム ）

こちらは使い慣れている付属校舎。本拠地は西本の助言で屋上となった。…風見学園内で、が条件で、校舎の外はアウトというルールは無かったからだ。

で、今は作戦会議中。

「まず、こういう手合いのゲームはツーマンセル（二人一組）が基本だ。だからまず組分けをするぞ。で、肝心の中身だが…

A 1 弘之&音夢ペア

A 2 晶&さくらペア

A 3 萌&和泉子ペア

にするぞ。ルールだと、ヘッドショットは一撃。その他は三回撃たれたら死亡判定を喰らってアウトだから、ここは機動力重視の俺と芳野「さくらでいいよ」…「さくらが陽動及び攪乱で行く」

「うん、妥当だな。さくらのすばやさは小動物並みだからな」

「むう~~~~~！また僕が小さいって言ったな！！それよりも、僕そこまで体力持たないよー！」

「…純一と旅行に行きたくないのか？」

「よし！お兄ちゃんのためにがんばるぞー！」

…何かさくらのやつ、既に飼い慣らされてる…。

「で、次にA3…萌さん達は俺達の攻撃サポート兼拠点の守備だ。基本俺達が進むルートから少し離れた所で待機してもらって、二階より下には行かない。誘き出した敵が来たら挟撃を狙う。合図はケータイで。んで、最後の一つ、A1はフリーだ」

「は？」「えっ？」

おいおい、ここまで念入りに計画しといて最後はこれかい！

「ん？勘違いするなよ。これでもちゃんと考えた結果だ。どうやっても一チームはこうなっちゃうし、それにこの中で一番場数を踏んでるのは俺だ。その俺が陽動をやらなくてどうする？ 幸い、コレはゲームだし実戦じゃない。それに二人とも、その場その場の判断が上手そうだし、大丈夫だと思ったのも理由の一つさ。ま、そこまで気負わなくて、気楽に行こうや！ んじゃ開始時間になったら俺と萌さん達は二階に、弘之達は二階以外のところで頼む。移動したら報告を忘れるなよ？」

「了解！」

ゲーム開始まで後一五分……。

〽 本校校舎Bチーム 〽

Bチームの本拠地は意表をついての生徒会室。今回のゲーム、相手の本拠地に設置されているフラッグを取れば勝ち、というルールもある。それ以外は校舎は壊すなどの禁則事項はある物の、普通のサバイバルゲームと何の違もない。

「…さて、こちらは敵の裏をかくために校舎の中に拠点を置いた

ものの、西本殿が居る以上向こう側は屋上を拠点に構えるだろうな」

「何でそんなことがわかるんだ？」

「考えてみる、屋上なら出入り口はあの狭い扉一つ。周囲はフェンスしか無いが元々設定されている武器がハンドガンタイプの物だから狙撃は不可能。突入しようにもバリケードを張られていたら待ち構えて居るであろう敵に蜂の巣にされるのは間違いない」

「……確かに。でも杉並、よくあの西本って奴のことがわかるな、そんなに話してないだろ？」

「何、軍事訓練を受けた者なら、自分が一番攻めにくいところに拠点を構えるのが道理、それだけのことだ。それに向こうは男子は二人のみ、それに加えこちらには水越妹がいる。戦力はほぼ倍と見て良いだろう。故に向こうは拠点防御に力を入れるはず……がしかし！！そこはイレギュラーの西本殿。バリケードに任せて全て攻撃に回すことも考えられる。よって、ここはオール二人一組ツーマンセルをやめ、三人一組が一つ、二人一組が一つ、の変則チームとする。！で、チーム分けだが…

B 3 純一・天枷・ことり

B 2 工藤・真子

B 1 杉並

とする。各自携帯ははマナーモードのバイブレーターも最小にして所持！連絡は密にするよう！」

「つてちょい待て！！ お前一人だけって大丈夫なのか！？」

「ふっ、安心しろ。お前は俺の実力を知っているだろう？ それに、俺は万が一のことを考えての一人だ。それより、朝倉チームは

敵拠点攻略も込めての三人なのだぞ？動きは遅くなるが、まあがんばってくれ」

「んなこといったって……ハア、かつたる……」

「朝倉君、そんなこと言わずにがんばりましょう！！（温泉旅行のために！）」

「そうですよ朝倉先輩！ 白河先輩の言う通り！！（良いデータが入ればお小遣いが……！）」

美春とことりは背後から凄まじいオーラを発しながら迫ってくる。その威圧は裏音夢にも匹敵したそう……。 （純一談）

サバイバル開始まで後二分……。

『両チーム、準備はいいな？ では、サバイバルゲーム、開始……！』

（ side Aチーム ）

「よし、それじゃあ作戦通りに！みんな、死ぬんじゃないぞ？」

「「「「「おう」」」」」

「 side B チーム 」

「うむ、では皆の衆、出撃だ！必ずや勝利を我らの手に！！」

「「「「「おう」」」」」

こうして、両チーム共に行動を開始した。

「 side A チーム （晶） 」

「晶、A1は中庭から行ってみる。あそこって狙われやすいけど、裏をかいて誰か来るかもしれない」

「わかった。もし接敵したら慌てずに。ま、そこら辺はゲームで知ってるだろうから、深くは言わないけど、気をつけるよ！」

「おう！んじゃ！！」

A1はそのまま一階まで足音を立てないようにしながらも素早

く移動した。

「よし、それじゃあ萌さんに和泉子さん、二人はそれぞれ別の階段に別れてくれ。そして階段の途中に鏡を仕掛けて廊下に待機。敵が来たらケータイを振って合図。わかった？」

「はいです」 「わかりました！」

そうして二人は三階に上がり右に萌、左に和泉子と別れた。

「じゃ、俺はここで待機するからさくらは近くの教室に隠れてくれ」

「オッケー！　それで敵さんが廊下を通ったら後ろからズドン！だね？」

「お、よくわかってるな。じゃあ急いで！」

こうしてAチームの配置は完了し、後はBチームを待つだけとなった。

作戦通りに行くぞ！」

最終話 目覚めと新たな始まり…（前書き）

お久しぶりです!!

今回で本編前のお話は（一応）終わりです！

次からはヒロイン別で新しく書いていくので、もう暫くお待ちください？
……え？待ってない？

そんな寂しい事は言わないでください（T―T）

……すみません、ふざけすぎました。

では、D・C・B・B・最終話、どうぞお楽しみください!!

最終話 目覚めと新たな始まり…

「弘之〜!!」

「岡野くん!!」

弘之を捜し始めてから、もう三十分以上。桜公園から自宅までの道を捜したが弘之の姿はなく、仕方なく桜公園に引き返してきたのだ。

「つくそ! 水越から連絡は!?!」

「……ごめん、まだきてない……」

「そうか……。まさかアイツまで何かあったんじゃないよな……」

桜公園はすごくとは言えないものの、そこその大きさがある。今は昼間だし、人が多いせいで捜すのに余計に時間を取られていた。次第に余裕を無くしてイライラし始めた健二達。すると、真木の携帯が鳴った。

「っ!! 眞子!? 今どこにいるの? ……奥にある大きな桜…あそこね。わかった。それで、岡野くんは!? ……………え? ほ、本当に!? よかったあ〜! うん、じゃあみんなで行くね。それじゃ!」

ピッ 眞子と電話が終わった真木はさっきと打って変わって明るい表情をしていた。

「岡野くん、見つかったって！場所は今言ったところだから急ごー！」

「了解！」

そして真木、美佳、健二の三人は枯れない桜を目指して走り出した。

） 真子side ）

…私が叫んでからどのくらい経ったのだろうか？一分？一時間？それとも…。

…なに考えてるんだろ。ダメだ、まだ頭が混乱してる。落ち着け、私。

目の前に岡野が倒れてる。声をかけても揺すっても起きないし、息もしていない。つまり……

死んだ。

慌ててまた考えてしまった事を振り払う。でも、死んでないと何回も繰り返し返そうと、目の前の光景がその考えを植え付けてくる。

違うと心の中で叫んでいるのに、涙が溢れてきた。

後から後から溢れてくる涙のせいで、視界が歪み岡野の顔が見えなくなる。

「…つく…っ…ひつく…うう…」

その時だ。私の頭に、暖かく、何故か安心できる温もりをもった手が置かれ、撫でられたのは。

「…泣かないで、まーちゃん」

「…え？」

小さい頃、本当に仲の良かった男の子が呼んでいた、私のあだ名。何度も止めてって言ったのに、結局変えること無くそのまま島を出ていった、アイツ…。

「…う…ヒ、ロ？」

「久し…ぶり…。それと…ごめん。まーちゃんの事、忘れて…た」

「本…当に…あのヒロ、なの？」

「うん…。あ、この感じ…まーちゃんごめん。多分また、まーちゃんの事忘れちゃう…けど、記憶がない俺、僕、僕、だから、よろしく…ね」

「ちょ、ちょっと待ってよ！また忘れるって一体…！」

「ごめん…この、目覚めは…桜の…が…暴…した、偶…然。だ
け…ど、今度目覚めれば、その時…は……………」

「ヒロ…？ヒロ！？」

その言葉を最後に、岡野…ヒロは意識を失ってしまった…。

） side out ）

「……………」

僅かに鼻を刺激する薬品の匂い。そして、体を包む温かい布団
の感触…。はて、何で俺はこんなところにいるんだ？

『…確か、眞子達に誘われて家を出て、時間が余ったから寄り
道して、それから…それから…？』

ダメだ。桜公園まで行ったのは覚えてるけど、その後の事が全
く…というかココ、病院だよな？倒れたか何かしたのか？

思い出している内に、段々と寝ぼけていた頭が働き始める。――まず、ここから起きて状況を確認しよう。そうしないと何にもできない。

そしてうつすらと目を開ける。夜明け前なのか、左側の窓から見える空は瑠璃色だ。

暗闇に馴れた目で部屋を見回すと、一人部屋だった。点滴もされてたみたいだけど、今は針も刺されずに部屋の隅に置いてある。

ゆつくりと布団をどようとして、気づく。

右側に、誰かが寝ているのだ。気を使ったのか、毛布が掛けられている。俯いて寝ているせいか、わかるのは肩まで伸びた髪の女の子だという事だけだった。

「看病…してくれてたのか」

そう呟いたとき、地平線から太陽が顔を出し、瑠璃色だった空を透き通るような青色に塗り替えた。

一瞬、その眩しさに目を細めたけど、すぐに慣れてその幻想的な光景に見入ってしまう。すると…。

「んうう…」

計ったみたいないなタイミングで、女の子が寝返りを打ったのだ。そして、その顔は…

「眞子…」

眞子だった。そして納得する。ここは水越病院だ、と。

「…うん……？　っ！！弘之、起きたの！？」

「お、おう……。心配かけてごめん」

「全く！！真木や美佳、高野だって心配してたんだからね！お陰で……」

それから一時間、眞子の口は止まることなく文句と愚痴という弾丸を吐き出し続け、それが終わった時弘之は、疲れた顔をしていたが、どこか嬉しそうな顔をしていた。

「って、コラー！！人の真面目な話を笑って聞くんてどういうつもりよ！？」

そしてそれが眞子にバレてしまい、結局看護師が朝の見回りに来るまで続いたそう。

{ side ??? }

「そつか…。『ヒロくん』の記憶が戻り始めちゃったかあ…」

壁一面に置かれた本棚。その中には、一冊で人を撲殺できそうな殺人的な厚さを持った本で埋め尽くされていた。

そして唯一本棚がない壁には大きな作業用デスクが置かれ、その上には書類が山脈を形成し、その中心にはこれまた大きなコンピュターが置かれ、そのコンピュターの前に、一人分の人影が逆光で浮かび上がっていた。舌つ足らずで高い声から少女だろう。

「桜の魔法が弱まったのかな？……だとしたら、急がないと…」

マグカップの中身を飲み干した人影は、一度背伸びをすると再びコンピュターに向き合った。

「待っててね、『お兄ちゃん』。後少して帰れるからね…」

少女の呟きは、誰にも届くことなく部屋の空気に溶けていった

…。

最終話

目覚めと新たな始まり…（後書き）

番外編は随時更新していきますのでそちらもよろしくお願いします
！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8523h/>

D.C.B.B.

2011年1月26日17時00分発行